
2018年度
「平成30年7月豪雨」で被災した
子どもの学びや育ちの支援活動助成

報告書

活動期間：平成30年7月豪雨発生～2019年3月31日



公益財団法人
ベネッセこども基金

「平成30年7月豪雨」で被災した 子どもの学びや育ちの支援活動助成

平成30年（2018年）7月の豪雨を受けて、被災した子どもたちの支援活動に対する助成を実施しました。緊急性を重視し、申請を受け付けた活動から随時審査を行い、支援対象を決定していきました。特に、病気や障がい、その他で生活上の困難を抱える子どもや、被災によるストレスや学習困難などを抱える子どもを対象とし、緊急性のある事業を優先するため、「すでに活動をスタートしている」もしくは「具体的な活動の目途がすでについている」活動であることを条件としました。

本報告書は、平成30年7月豪雨発生～2019年3月31日までに実施された28事業の活動報告となります。

- ・募集期間：2018年7月20日～2018年9月30日
- ・助成対象期間：「平成30年7月豪雨」発生～2019年3月31日
- ・助成金総額：2,000万円以内
- ・応募数：61件
- ・採択事業数：29件
- ・採択助成金額合計：20,099,725円

※被災地の環境変化の影響を受け、申請事業の未実施・縮小などが生じたことによる助成金の返納もありました。

助成先団体および対象となる事業（受付順）

| ページ | 団体名 | 所在地 | 事業名 | 活動地域 | 採択助成金額(円) |
|-----|---------------------------------|-----|---|-------------------|-----------|
| 4 | あそび屋。おせと | 岡山県 | 西日本豪雨災害子育て支援 自由あそびのひろば | 岡山県 岡山市 | 294,012 |
| 5 | 子どもの心と身体の成長支援ネットワーク | 東京都 | おやこあそびのひろば | 広島県 呉市 | 380,000 |
| 6 | 特定非営利活動法人 くらしき放課後児童クラブ支援センター | 岡山県 | 倉敷市真備地区における学童保育サポート事業 | 岡山県 倉敷市 | 1,000,000 |
| 7 | 一般社団法人やかげ小中高子ども連合Y K G 60 | 岡山県 | 小田川流域に住む小中高生の学習・生活支援 | 岡山県 矢掛町 倉敷市 | 500,000 |
| 8 | 特定非営利活動法人歩 | 愛媛県 | 大洲市の障がいのある子どもの居場所づくり | 愛媛県 大洲市 | 780,000 |
| 9 | 災害支援ネットワーク NPOかけはし | 岡山県 | 避難所および仮設住宅における、 子どもや高齢者の心のケア、運動不足の解消 | 岡山県 | 653,000 |
| 10 | 岡山移住交流の会カモミール | 岡山県 | 水害により被害を受けた親子への 援助及び地域との連携事業 | 岡山県 岡山市 | 703,000 |
| 11 | SOSU | 岡山県 | 被災親子に寄り添う居場所をつくろう！ ～音楽と文化体験にあふれるサロンで継続した支援を実施～ | 岡山県 | 561,610 |
| 12 | 特定非営利活動法人 鍼灸地域支援ネット | 滋賀県 | 避難所等にてストレスを抱える児童への小児はり と保護者への鍼灸マッサージ活動 | 岡山県 倉敷市 | 500,000 |
| 13 | 一般社団法人 岡山県助産師会 | 岡山県 | 親子・カップル・みんなで学んで体験し 命を育む支援事業 | 岡山県 | 562,000 |
| 14 | 一般社団法人 S G S G | 岡山県 | MABI STUDENT FES | 岡山県 倉敷市 | 1,000,000 |
| 15 | Act For Nanyo Kids | 愛媛県 | 西日本豪雨災害にあった子どもたちの心に寄り添う | 愛媛県 南予 | 950,000 |
| 16 | 一般社団法人 OPEN JAPAN | 宮城県 | 夏休み子ども体験プログラム | 愛媛県 西予市 | 630,378 |
| 17 | 岡山子育て応援団パピママ | 岡山県 | 子どもたちへの心のケア | 岡山県 倉敷市 | 973,900 |

| ページ | 団体名 | 所在地 | 事業名 | 活動地域 | 採択助成金額(円) |
|-----|--|-----|---|------------|-----------|
| 18 | 認定特定非営利活動法人 ひろしまチャイルドライン 子どもステーション | 広島県 | 子どもに笑顔と安心を ～子どもの気持ちに寄り添う継続体制づくり～ | 広島県 | 574,000 |
| 19 | 公益財団法人 ジョイセフ | 東京都 | 広島県呉市天応地区： 被災女性・母子の安全で安心できる居場所作りと 心のケア | 広島県 呉市 | 790,000 |
| 20 | 一般社団法人 孫育て検定協会 | 広島県 | 内の子も外の子も共に地域の宝 ～祖父母パワーで被災地子ども遊び寺子屋～ | 広島県 広島市 | 650,000 |
| 21 | 特定非営利活動法人 呉子ども NPO センター YYY | 広島県 | 夏休み星空映画会「実写版忍たま乱太郎」 | 広島県 呉市 | 986,320 |
| 22 | 一般社団法人 パパフレンド協会 | 広島県 | 『子ども達の笑顔を守る』プロジェクトの延長戦！点から面の支援で地域の元気へ～みんなで遊ぼう！考えて動いてストレス発散&免疫強化&防災・減災学習！～ | 広島県 | 979,000 |
| 23 | 一般社団法人 体力メンテナンス協会 | 愛媛県 | 平成30年豪雨災害で被災した大洲市の ママへのトータルケアプログラム | 愛媛県 大洲市 | 313,000 |
| 24 | 認定特定非営利活動法人 日本災害救援ボランティア ネットワーク | 兵庫県 | 倉敷市岡田小学校の教育活動正常化にかかわる 支援活動 | 岡山県 倉敷市 | 500,000 |
| 25 | 特定非営利活動法人 RAY of HOPE | 岩手県 | 災害地での子ども参加型花火大会の実施 | 広島県 安芸郡 | 142,307 |
| 26 | 特定非営利活動法人 だっぴ | 岡山県 | 7月豪雨災害により被災した子どもたちへの 支援情報の集約と発信事業 | 岡山県 | 1,000,000 |
| 27 | 災害で生活が変わった子供を 支援する会 | 広島県 | 小さな勇者を応援しよう！！ 水害に立ち向かった子どもたちへ | 広島県 広島市 | 325,080 |
| 28 | 遊び場を考える会 | 岡山県 | プレーパーク活動による子どもの心のケア ～子どもが「遊び育つ力」を育むことを支える遊び場 づくり～ | 岡山県 | 999,918 |
| 29 | 遊ぼう会ぷらす | 広島県 | 三原市本郷地区における 子どもの居場所づくりと母子サポート事業 | 広島県 三原市 | 912,000 |
| 30 | 社会福祉法人 三原市社会福祉協議会 | 広島県 | 遊 viva 学 viva 三原 * viva の意味は、「住むこと、生きること」です | 広島県 三原市 | 1,000,000 |
| 31 | 認定特定非営利活動法人 アトピッ子地球の子ネット ワーク | 東京都 | 平成30年7月豪雨（西日本豪雨） アレルギー患者・災害弱者支援活動 | 岡山県 倉敷市 | 1,000,000 |
| — | 岡大教育学生ボランティア | 岡山県 | 「出張！おかだい（岡大）教室」（被災児童生徒の居場 所づくり） | 岡山県 | 440,200 |

西日本豪雨災害子育て支援 自由あそびのひろば

◎ 事業の目的

支援対象：西日本豪雨災害で被災した親子

解決したい課題：

1. 被災地では、小学校や幼稚園・保育園は夏休みに入ったが、公園はごみ置き場となり、子どもの遊び場が失われている。
2. 家は被災により生活環境が変化し、それに伴うストレスが生じている。

事業目的：

1. 子どもたちにあそび場を提供することで、子どもの育ちを身体・精神の両面から支援する。
2. お父さんお母さんが情報交換できる場をつくることで、被災によるストレスの軽減を図り、また同時に地域のコミュニティの場となることで、親同士のネットワークを作ることも目的とする。

◎ 事業内容と活動経過

事業内容：

江尻レストパーク（岡山市東区瀬戸町江尻）の研修棟および屋外（ドーム横ひろば）を活用し、子どもたちに自由あそびの場を提供する。

研修棟では、おもちゃやクラフトセットなどの自由あそび、屋外では水遊びができるようプールや水鉄砲などを準備する。

自由あそびの場を近隣地域の子育て世代が、ボランティアとして見守り活動を行う。

活動期間：

7月20、21、23、24、25、26、27、28、30、31日の10日間、および8月2、6、9、11、16、20、23、25日の8日間の合計18日間

◎ 事業の成果

「自由あそびのひろば」の参加人数は、支援する側の親子含め、初日は大人19人、子ども31人から始まった。その後徐々に人数が増え、一番参加者が多かった最終日には、(株)ベネッセホールディングスのご協力により、しまじろうのコンサートが行われ、大人90人、子ども210人の参加があった。

本活動全ての参加人数の合計は、大人754人、子ども1,329人で

あった。

本当に多くの方々に支えていただき、そのおかげで大きな事故や怪我などもなく、子どもたちを無事最後まで預かることができた。

そして大人も子どもも学区や世代を超えて繋がり、人との絆が生まれた。

◎ 課題および展望

今後の課題は、災害に遭われた方々への支援をどのように継続するかだと思う。

今回の活動を通じて繋がったお母さんや子どもたち、そして地域の方々との輪を今後も大切に、自分たちに何ができるかを考え、また違った形で何らかの活動ができればと思う。

現時点では、この災害支援で繋がった方々に声をかけ、月に一回集まれる場（外遊び企画）を用意している。

9月は江尻レストパークにて岡山市子どもセンター主催で、音楽鑑賞会を企画していただいた。

10月は瀬戸下公園にて「遊び場。おせと」主催のプレーパークを開催し、その場に、この夏、支援活動に参加していただいた、フラワーアレンジメントの方やバルーンアートの方、読み聞かせの方々に声をかけさせていただき、一緒にワークショップなどのブースを企画し、参加していただいた。

2019年7月6日には災害から一年の復興支援イベントを企画している。この企画は、支援する側・される側の枠を越えた子育て世代のつながりと、地域の方々や企業、団体などのつながりで企画していきたいと思う。

これからも日頃の人と人とのつながりを大切に、子どもの笑顔と大人の笑顔がたくさん増え、地域の輪がどんどん広がっていけばと思う。そして、今後このような災害が起きた場合にも、直ぐに助けあえるコミュニティが確立されることを目指したい。



送迎バスからレストパークへ訪れる参加者：保護者の送迎が難しい小学生のために、皿井タクシーのご厚意により無料送迎バスを運行いただいた。



木工作を楽しむ参加者：既存の備品や新たに購入した消耗品を用いて、思い思いに木工作を楽しんだ。



プール遊び：日射病防止のためテントを張り、その下でプールを楽しむ子どもたち。

おやこあそびのひろば

◎ 事業の目的

平成30年7月豪雨の被災地にて親子で遊べる場所を提供し、おもちゃで遊んだり、手作りおもちゃの作成によって、被災によって変化した日常生活からのストレスが和らぐような時間を提供する。また生活上での悩み等を専門家に相談できる環境を作り、それらの不安を少しでも和らげる手助けをする。

◎ 事業内容と活動経過

<平成30年7月豪雨被災地である広島県安芸郡坂町にて、親子と一緒に遊べる遊びの広場を開催>

7月より認定NGO法人ピースウィンズジャパンと連携を取り、支援活動地域の情報共有を行い、どのタイミングで活動ができるか検討を行った。それをふまえて各被災地域の役所、教育委員会等とも話し合いを重ねた。また協力団体等に連絡を行い、現地でのボランティアスタッフのお願いやおもちゃの手配等の準備を行った。

会場：

坂町・平成が浜仮設住宅集会所（広島県安芸郡坂町平成が浜）

開催日程：

2018年9月23日（日）24日（月祝） 11：00-16：00

スタッフ：

ボーイスカウト、ガールスカウト、ピースウィンズジャパン、おもちゃコンサルタント、医師

内容：

東京おもちゃ美術館（認定NPO法人芸術と遊び創造協会）より借りたおもちゃを使って、親子で遊べる遊びの広場を開催。手作りおもちゃコーナーも併設し、小児科医師が常駐し、気軽に相談ができるように配慮した。

開催場所は、ピースウィンズジャパンが支援活動を行っている地域にある仮設住宅集会所を坂町役所から提供いただき、周知については坂町役所を通じて仮設及び近隣にチラシを配布。現地で活動しているピースウィンズジャパンを通して活動中に宣伝、当ネットワークのHPなどで周知を行った。

◎ 事業の成果

参加者：

9月23日参加者70名、スタッフ11名。

9月24日参加者80名、スタッフ8名。

乳幼児はおもちゃ、小学生はゲーム、クラフト、お父さんはカードゲームが人気だった。クラフトに関しては保護者の方も一緒に作る光景が多く見られた。2日間の開催のため、両日遊びに来る参加者も多く、「友達を連れてきたよ。」と紹介してくれる場面も見られた。

◎ 課題および展望

1. 当団体は東京にあるため、開催地域での打ち合わせは費用の関係から1回のみで、現地で活動をしているピースウィンズジャパンとの密な連携が必要とされた。この点については、熊本地震の際にも「おやこあそびのひろば」（ベネッセこども基金からの助成事業）での連携を行っていたので、その経験を活かしてスムーズに行うことができた。今後これらの経験を次の事業（2019年12月には岡山県にて開催予定）に活かせるようにしたい。
2. 他団体からスタッフの協力をお願いしたため調整等は苦労したが、今回のイベントにより横のつながりができ、今後も連携してこのようなイベントを地元主催で企画できるようになった。2019年11月にボーイスカウト広島県連と、おもちゃコンサルタントで同様のイベントを開催予定である。
3. イベントの内容からして、被災地域のある程度の落ち着きが必要だったため、企画は早い段階からできていたが、開催できる場所の確保がなかなか決まらず、日程が決まったのが4週間前だった。さらに、開催場所が2週間前に変更になった。（現地打ち合わせで下見した場所ではなかったため、ピースウィンズジャパンのスタッフに再度下見してもらった。）被災地の状況は刻一刻と変わっていくので、変化に柔軟に対応しすぐに動けることは大切だが、資金が無いとできないことなので、助成金の申請に関して状況変化を伝えて、密にコミュニケーションをとっていきたい。



開催会場：坂町・平成が浜仮設住宅集会所をお借りした。



室内の様子：入口に受付、手前におもちゃコーナー、奥にクラフトコーナーを設置した。



医師との相談：参加者が気軽に相談できるようにしており、医師にお子さんの様子を話す場面も見受けられた。

倉敷市真備地区における学童保育サポート事業

◎ 事業の目的

被災した真備地区にある6つの小学校区の子どもたちを対象に学童保育を行うことで、その保護者たちが一日も早く日常生活を取り戻せるよう支援すること。また、被災によって傷ついた子どもたちの心のケアを行うことを目的とする。

◎ 事業内容と活動経過

- 7/12 “ながおキッZ”にて12人の子どもの受け入れ開始
被災後真備地区の小学校はそのまま夏休みに入ったため、午前中から子どもの受け入れをする場所が必要となった。しかし、真備地区では児童クラブ自体が被災していたり避難所となっていたため、隣の玉島地区にて受け入れを開始する。同時に被害の少なかった真備地区呉妹小学校たんぼぼクラブでも受け入れを開始する。
- 7/13 「昼食提供」開始
“ながおキッZ”の保護者と地域の栄養改善委員さんの協力で、手作りの弁当を持って来られない子どもに、少しでも温かいものを食べさせてやりたいという“ながおキッZ”の保護者の思いから始まる。
- 7/14 玉島公民館長尾分館にて被災地区の子どもたちの受け入れ開始
登録約70名。
- 8/4 「学習支援」開始
他の小学校より早く夏休みに入ってしまったため、学習面の遅れを心配する保護者が多いことから、作陽大学の先生や学生の力を借りて始める。
- 9/1 「まびひょっこりおもしろおたからクラブ」を開所
被災した真備地区6小学校区を対象に支援の必要な子どもの受け入れと、今回の被災で家庭保育が困難になった家庭の子どもの居場所提供として開所。校舎が建て直しとなる箭田、川辺小学校の子どもたちの受け入れも継続。それぞれ間借りしている小学校から送迎にて通所。
- 10/9 箭田・川辺小学校も真備地区に仮設の校舎が建設された
児童クラブの場所を真備地区真備公民館に移す。登録7名。
- 12/31 「まびひょっこりおもしろおたからクラブ」を閉所
すべての登録児童がクラブに戻るなど放課後の過ごし方に目途がたったため役目を終える。

◎ 事業の成果

被災後いち早く子どもたちの受け入れを開始し、夏休み終了まで、同じ場所で、ある一定の支援員のもと、保育することができたことは、被災して心に傷を負った子どもたちにとってよかったのではないかと思う。

なかでも温かい昼食の提供、保護者をもてなす「ほっこりカフェ」など、支援員や子どもたち、協力してくださる方々から出たアイデアを形にしていくことで、多くのストレスを抱えながら新しい生活への準備を始めた保護者にとっても、少しは心落ち着ける場所であったなうれしく思う。

◎ 課題および展望

以前より各小学校の児童クラブに入所していた子どもたちは、2学期からそれぞれのクラブに戻って行った。しかし、年度当初より児童クラブに入所していなかった子どもについては、開所時間などの関係でなかなか地元の小学校に戻れない子どもも多く、改めて倉敷市における児童クラブ運営のバラつきに問題を感じた。

真備地区では、支援員自身が被災しているケースも多く、開所時間の延長・日数の拡大はなかなか難しいと思うが、子どもの居場所や保護者支援を考えると対応していかなければならない課題だと感じた。

また、今回の災害で全国から多くの支援をいただいた。なかでも児童クラブにとって最も大切な支援員の派遣は、とてもありがたいものだった。これを機会に、こうした災害がいつどこで起きても支援員を派遣できるような仕組み作りも、今後取り組んでいきたい課題の一つとなった。



昼食作り：ボランティアの方が作ってくれる昼食。時には自分たちもお手伝い。



みんなで昼食：隣の調理室で作った温かい昼食をみんなで「いただきます」。



ミーティング：みんなで話し合っ夏休みの生活を作った。

小田川流域に住む小中高生の学習・生活支援

◎ 事業の目的

「平成30年7月豪雨」により、矢掛町・倉敷市真備地区では小田川の堤防決壊により、甚大な被害を出した。岡山県内では依然として一部地域で鉄道や道路が寸断され、生活に大きな影響を与えている。特に小中高生は避難所で生活したり、学習・生活物資が流出したりと困難な生活が続いた。

子どもたちは、日々支援の片付けの中で「何かしたい」「楽しいことしたい」そんな想いがふくらんでいる。大雨から今日までのみんなの心の中にある色々な気持ちを出して、今困っていること、こうなったらいいな、何ができるかな等、いろいろ考え行動に移している。学習スペースの確保と学習・生活支援センターとして、放課後子どもたちが集える空間として、みんなの基地【みんきち】を整備するとともに、復旧・復興イベントを開催する。

◎ 事業内容と活動経過

【支援対象】

被災した高校生・地域の子どもたち

【実施内容】

- (1) 学習スペースの確保と学習・生活支援 【みんきち】の開設
※9月から12月の週日15:30～19:30 支援員2名配置
 - ① 被災生徒の学習環境の確保
 - ② 居場所がなく帰りたくない生徒のホッとできる場所の確保
 - ③ 弁当を用意できない被災生徒の補食
 - ④ ボランティアをしたい生徒の活動場所の確保
 - ⑤ 地域の子どもや大人とつながる場所の確保
- (2) 避難所の生活実態調査 7月14日(土)～
- (3) 文房具・教材の支給 7月14日(土)～
- (4) 復興支援イベント『矢掛ダヨ! 全員集合～イエーイ夜市』
8月18日(土)開催※地域の中학생中心の企画・運営
- (5) 山の上干柿まつり 雲の上カフェの開催 12月23日(日)
- (6) 「語り部活動」 2月～3月

◎ 事業の成果

放課後子どもたちが集える空間【みんきち】を整備した。もともとこの建物は、矢掛小中高こども連合の本部として矢掛町から貸与されたもので、矢掛駅から100m、矢掛高校から200mと学習・生活支援センターに適切な立地である。

有償ボランティアの支援を得て、被災した子どもたちを中心に、温かい補食を提供する。月曜から金曜までの15時30分～19時30分開館し、子どもたちが自由にのんびりゆったり、楽しく過ごせるような場所になっている。そして、何気ない交流や、会話の中から夢が生まれてカタチになる場所である。利用者は5～30人/日で日によって差はあるが、安定して生徒たちが集まってくる。3月には被災した子どもたちが巣立っていった。

◎ 課題および展望

被災後、親戚の家やみなし仮設住宅などでの暮らしに、自分一人の空間を持ってない子どももいた。自分の家が解体された子どももいた。どんな使い方もいいから、何もしなくていいから、美味しいものを食べたり、音楽を聞いたり、お昼寝したり、おしゃべりしたり、ゲームしたり、漫画読んだりと自由にくつろげる場【みんきち】。小中高校生目線で一つずつ作られていく【みんきち】が、より楽しい場所に発展していく。復旧から復興へ、そして新しい価値の創造へ。小田川流域は動いている。もちろん子どもたちも。

今後、自分に起こったことを見つめて伝える「語り部活動」を充実させていく。



復旧作業：小中高校生も復旧作業に主体的に参加。被災翌日から活動していた。



「みんきち」整備：自分たちの居場所「みんきち」整備も自分たちの手で実施。



放課後の「みんきち」：自由にのんびりゆったり、楽しく過ごせるスペースに。補食も充実。

大洲市の障がいのある子どもの居場所づくり

◎ 事業の目的

大洲市内では全世帯の5分の1にあたる約4,600世帯が床上・床下浸水する大きな被害を受けた。地域全体が復興に時間がかかり、さらに大人は片づけや再建で忙しく、子どもたちからは「外出できない」「楽しみだったプールにも行けない」との声もあった。また、大洲市では福祉避難所が開設されず、一般避難所で心身ともに負荷がかかった障がい児もいた。

当法人では大洲市内の障がいのある子どもたちを主な対象とし、彼らが安心して過ごせ、気分転換ができる居場所づくりを行う。

◎ 事業内容と活動経過

1. ニーズ調査と必要な支援の提供

発災翌日から、当法人のサービス利用者150人に対して自宅・避難所の訪問、電話にて被災状況や安否確認及びニーズ調査を継続して行い、衣類や食料などの物資を届けた。また、「市から給付された特殊なバギーを失った」「障がい者割引の登録をしていた自動車の水没したが、数日後には県外に行く用事がある」などの様々な相談を受け、関係機関に連絡して手続きの支援も行った。

2. 障がいのある子どもの居場所づくり

多くの学校は災害で夏休みが早まり、休業や閉店をした店舗や施設も多かった。

当法人でも3施設が浸水被害を受けたが、幸い当法人が運営するコミュニティカフェ「とことこ」は被害を免れた。そこで子どもたちが安心して過ごせる居場所づくりとして、特定非営利活動法人み・らいず2のサポートを受けて、夏祭りのイベントを3回に分けて行うこととした。

- (1) 放課後デイサービスあゆむにて夏祭り(8月23日10時～、14名参加)
- (2) 放課後デイサービスあゆむ2にて夏祭り(8月23日14時～、16名参加)
- (3) 地域の子どもたちを招待してとことこにて夏祭り(9月1日10時～、46名参加)

み・らいず2から3名のスタッフが協力を駆け付け、さらに松山大学の学生もボランティアで加わった。参加者にはコミュニティカフェ「とことこ」の手作りいちごシロップを使ったかき氷を無料で振る



相談支援専門員による家庭の訪問：なるべく多くの世帯を訪問し、安否確認やニーズの調査を行った。



放課後デイサービスあゆむでのイベント：施設に機材を持ち込み出張夏祭り。いちごのかき氷が好評だった。



コミュニティカフェ「とことこ」でのイベント：色付けしたりらメなどを混ぜたオリジナルの slime 作りに子どもたちは大喜び。

舞ったほか、くじ引きやゲーム、スライム作りを楽しんでもらった。

◎ 事業の成果

被災により生活に困難を抱える利用者の声やニーズをいち早く聞き取り、必要な物資や支援を提供することができた。特に障がい児がいる家庭の中には買い物に出ることが難しい方もいらっしゃり、自宅まで物資を届けることの重要性を感じた。

また、積極的・継続的に家庭訪問をし、自ら声をあげづらい障がい者、自身の困りごとに気づいていない障がい者の状況を確認して、支援をすることもできた。現在も電話や訪問によるフォローを行っている。

夏祭りイベントでは、この夏、楽しい思い出が少なかった子どもたちにとって、いきいきと気分転換できる空間を提供できた。また、徐々に親子で出かけることができたという方も多く、「久しぶりに子どもとゆっくり過ごせた」「今年初めてかき氷を食べた」との感想も聞かれた。

◎ 課題および展望

今回の災害では福祉避難所が開設されず、一般避難所での生活を強いられた障がい児も多い。また、どのサービスも利用していない地域の障がい者に対して支援が届きづらい状況も見受けられた。さらに大洲市では被害が広範囲に及んだこと、自宅以外の場所に避難している方もいて、全ての家庭を訪問し、状況を確認することができなかった。日ごろから、関係機関や各事業所が連携して災害時のそれぞれの役割を話し合い、災害時に全ての障がい者に必要な支援が迅速に行き届くようなネットワークを構築しておく必要があると感じた。

また、困ったことや不安感をうまく周りに伝えられない子どもや、時間が経ってから不調をきたす子どももいることから、今後も密に関わりながら、ケアを行っていきたい。

避難所および仮設住宅における、 子どもや高齢者の心のケア、運動不足の解消

◎ 事業の目的

大規模災害が発生した際、ライフラインの復旧や救援物資運搬など生活基盤の確立が優先され、子どもたちの心のケアはどうしても後回しにされているのが現状である。

しかし、災害によるトラウマを上手にケアしないと、PTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症したり精神的バランスを崩してしまったりすることは、これまでの大規模災害の例から見ても明らかである。また、復興が進められている現地では、広場への仮設住宅設置やスクールバスによる遠方からの通学に伴い、子どもたちの移動が制限されていることから、極度な運動不足が問題となっている。これからの日本を担う子どもたちのために場所と時間を提供し、ストレス軽減など心のケアや運動不足の解消、学習支援等を行うことが重要だと考えている。

◎ 事業内容と活動経過

岡山県倉敷市真備町において、民生委員や他の支援団体と協力して、夏祭りやクリスマス会、餅つき大会、豆まき会などイベント企画を定期的に行った。地域の方々も話し合いに入っていただくことで、「子どもたちにつくらしい夏休みの楽しい思い出を作ってあげたい」「若いお母さんのために何かしてあげたい」「子どもたちが次回を楽しみにしている」など生の声を聞くことができ、地域の要望にそったイベントの企画を進めることができた。

【主な事業】

平成30年

- 7月～8月 折り紙や鉛筆、ノートなど文具類の救援物資提供
- 8月25日 にいみ子どもまつり
- 9月16日 川辺地区の炊き出しに合わせた縁日（ヨーヨー釣り）
- 10月21日 音楽会&プラ板ワークショップ
- 11月23日 第1回 KIZUNAフェスタ（ヨーヨー釣り）
- 12月15日 餅つき大会
- 12月23日 クリスマス会&わくわく科学ランド

平成31年

- 2月2日 豆まき会
- 2月17日 まび新春まつり（わくわく科学ランド）
- 3月中旬 青い鯉のぼりプロジェクト
- 4月13日 第2回 KIZUNAフェスタ（わくわく科学ランド）



夏祭りでのヨーヨー釣り：各地の夏祭りでも無料のヨーヨー釣り屋台を出店した。



プラ板ワークショップ：美作大学ボランティアセンター協力で開催したプラ板ワークショップ。



餅つき大会：昔ながらの杵と臼による餅つき。地域のお年寄りに餅のこねかた等を教わった。

◎ 事業の成果

倉敷市真備町上有井地区でのイベントは、子どもから高齢者まで幅広い年齢層の参加があり、元気な地域作りに大切な『三世代交流』にもつながった。高齢者が自発的に運営スタッフに加わることで、生活不活発発病の予防にもなっている。

はじめは子どもだけの参加が多かったが、回数を重ねるごとにお母さん方の参加も増え、「子どもたちがあんなに気持ちが高揚しているのを久々に見られました。」「家の改修で私は参加できませんでしたが、子どもたちは、キャッキ言いながらカルタ大会の結果を教えてくださいました。」などイベントごとに感想を聞かせてくれている。また、災害支援ネットワークおかやま@倉敷の会議において、倉敷市社会福祉協議会や他の支援団体と情報共有を図り、イベント毎に各団体の得意分野を活かしながら、地域とボランティアが協同した企画・運営を行うことで効果的な支援活動を行えた。

◎ 課題および展望

科学の学びと遊びを融合した「わくわく科学ランド」は好評を得ており、お祭り等で体験をされた方から「是非、うちの親子イベントでも開催してほしい」等の要望をいただいている。

しかし、いまだに子どもの支援があまり入っていないエリアもあり、各方面と情報交換をしながら、少しずつでも上有井地区のような活動を展開できると良いと考えている。

過去の事例をみても、発災後から数年たって、心のバランスが乱れ、暴力行為や引きこもりなどケアを必要とする子どもたちも多にいる。今後も継続して支援活動を行う必要があると強く感じている。

水害により被害を受けた親子への 援助及び地域との連携事業

◎ 事業の目的

今回の西日本における広域豪雨災害は人々の精神面に影響を与えている。特に西日本に移住してきている東日本大震災を経験した親子は、今回の豪雨災害を体験することで再度精神的なダメージを受けている状況にある。そのため、親子が参加できるワークショップや講座を開催することで、親には癒しの場を、子どもには楽しめる場を提供し、精神的なダメージを軽減する。そして、防災意識の低かった岡山で地域の防災の意識を高めてお互いに協力できる環境を作る。

◎ 事業内容と活動経過

7月9日にはカモミールルームを吉備公民館で臨時開催し、被災者が精神的にゆっくり休め、これからのことを相談できる場を提供した。その後も臨床心理士の先生をお呼びしてカウンセリングを行ったり、アロマセラピストによるマッサージを行ったりして不安な気持ちをケアできる場を提供した。提供の場には託児スタッフが子どもの見守りを行い、母親の心のケアにもなった。今回の豪雨災害は子どもへの精神面での影響を軽減し、心をケアする場・楽しめる場とするためのワークショップも同時に開催することで親子が一緒に楽しめた。

防災カフェも行っている。東日本大震災を経験した人達に自らの体験を語ってもらい地域の人と一緒に災害時の取組を話し合う場を設けることで、地域の防災の意識を高めてお互いに協力できる環境を作ることを目指している。豪雨災害後は岡山市内の公民館や保育園等で出張防災カフェの依頼が増えている。この出張防災カフェを行う中で、様々な問題があることがわかってきた。ファミリー世帯の多い地域では、岡山に転勤した夫と一緒に転居した母子が豪雨災害に遭遇しどのように避難するのかかわからず、知り合いもなく地域の情報がなく不安であったという話を聞いた。

福祉施設との共同開催イベントでは、災害時は障害を持つ人が避難困難な状況にあることを知った。豪雨災害で甚大な被害のあった倉敷市真備町へ支援に行き、泥の片付け、炊き出し等のお手伝いを行う中で現地に残る人への支援の必要性を感じる一方、被災地域に住むことを危険に感じた家族がより安全な岡山市内に移住

している状況もわかってきた。これらの状況を改善するため、まず親子への支援のために親子サロンにおいて託児を行い、岡山に知り合いのいない母親たちを繋げるため親子サロンを開催し託児を行った。

◎ 事業の成果

親子へのワークショップやアロママッサージを行うことにより、親子の心身を癒し子どもたちが楽しめる場所を作ることができ成果があった。母親同士もお互いに水害での経験を語り合うことで心の不安が軽くなったり、知り合いのいない状況で災害にあい不安感をずっと感じていたが、知り合いができほっとしたとの声があった。

防災カフェでは、平常時の災害の備えの学び、次の災害に備えるための意識の改革と組織の構築、地域コミュニティの形成を行うため、吉備公民館や近隣の施設で防災の勉強会、防災クッキング、ゆるく話し合う場を設けるなどの活動を行った。様々な団体と連携することで新たな問題を発見できた。地元の人も参加し、地域での問題点を語り合う場を提供できた。

◎ 課題および展望

行政と連携して防災講座を行うことも検討中である。これからは、地元だけでなく、より広い範囲で岡山市危機管理課との連携による防災講座や「逃げ遅れる人々 東日本大震災と障がい者」の映画上映会等を別の場所でも行うことで、行政組織、近隣福祉施設と地域住民に対し避難に関する連携を行うための意識の共有を行う必要があると考えている。



「逃げ遅れる人々」の映画上映会と映画監督さんのトークイベント：障がい者支援団体「ぬかつくとこ」と共同開催。真備町の水害状況の報告も実施。



防災カフェ：岡山市西消防署防災センターで親子一緒に救命救急講座を受ける。



親子サロン：親と子どもたちが楽しめる場を提供。

被災親子に寄り添う居場所をつくろう！ ～音楽と文化体験にあふれるサロンで継続した支援を実施～

事業の目的

対象：総社・真備地区の被災親子

課題：居場所がない。ストレス・不安の軽減。

災害以降、環境の激変で被災親子がストレスを抱えていた。みなし仮設へ移り、同じ境遇にある親子が不安を共有できる場所がなく、仲間が身近にいないという状況に体調不良を訴える親にも多く出会ってきた。

行政・市町村の枠にとらわれず、経過とともに変化していく様々な親子の不安やニーズに同じ子育て世代として寄り添い、一瞬でも日常を忘れ、心がパッと明るくなる居場所をつくることや不安やストレス軽減の場となることを目的とした。

事業内容と活動経過

岡山県総社市役所前のビル1階を借り、7か月間で8種類のイベントを企画実施

- ①8月18日「宮大工さんとお箸を作ろう」
- ②8月25日26日「大芦高原ファミリーキャンプ」
「楽しい夏休みの思い出がない。」との声を受け、片付けに追われる親たちも、ストレスを発散させ、思い出作りができるよう企画
- ③8月27日「ファミリーヘアカット」
親子で一緒に気兼ねなく出掛けられるヘアカットを企画
- ④9月5日・10月22日・12月10日 「住まいのこれから勉強会」
過去の災害被災地で復興支援に携わってきた先生方より、リフォーム・お金・制度などが相談できる企画
- ⑤9月24日「子供の心メンタルケア」
日本イスラエイドサポートプログラム様による子どもの心のケア勉強会を実施
- ⑥12月1日2日「おもちゃで遊ぼう」東京おもちゃ美術館のおもちゃを多数用意
- ⑦2月3日「豆だ豆腐だ節分だ」
親子食育イベントやお豆腐屋さん指導のもと豆腐や湯葉づくりを実施。
- ⑧9月、3月サロン開催
子どもは施設内で自由に遊び、大人はフリードリンクとケーキやお菓子で況を語り合う会を実施。



宮大工さんとお箸を作るイベント：災害で流されてしまった日用品で最も身近な家族のお箸を作成した。



大芦高原キャンプイベント：1泊2日のキャンプイベントに7家族を無料招待。家族写真を失った被災者のために、カメラマンを呼び、家族写真をプレゼント。



住まいのこれから勉強会Part1～Part3：過去の災害被災地で復興支援に携わってきた先生方より、リフォーム・お金・制度など、時間を追うごとに変わる課題を共有しアドバイスもらった。

事業の成果

- ①食事をするたび、交流を思い出せるよう企画。一流の宮大工からカンナの手さばきを学び、有意義な体験となった。
- ②7組の家族を無料招待。オーナーの善意と、上山地区、20代の若者たちの協力を受け、ポルカでの資金調達にも成功。家族写真を失った被災者のために、カメラマンを呼び、家族写真をプレゼント。夜、お酒を飲みながら語り合う時間は、何よりの癒しの時となった。子どもも新学期の英気を養った。
- ③毎日の作業で髪にまで手が回らない母親たちに、リップグロスをプレゼントし、ワクワクを呼び覚まし、家族に明るさが生まれるようお願いを込めた。子どもは新学期前にさっぱりとし、待ち時間はシャボン玉・楽器等で思う存分遊び、楽しく過ごした。毎日の大変さを少し忘れられる、癒しの場となった。一人残らず笑顔で帰っていく姿が印象的だった。
- ④時間を追うごとに変わる課題に対して、継続的に開催することで丁寧に拾ってきた。子育て世代に対象を絞ったことで、遠慮なく発言し課題を共有。食事をしながら話をする事で、時間と回を重ねるごとに打ち解けて相談できる場となった。行政からの情報だけでは不十分で、信頼のおける専門家の話は、大変ありがたいとの声。会の内容をホームページに掲載するなどSNSを駆使し、積極的に拡散し情報を発信。
- ⑤子どもたちにはおもちゃコーディネーターやスタッフとともに遊びの時間を、大人にはフリードリンクコーナーでくつろぎの時間を提供。

課題および展望

薄れていく被災地への関心とともに、徐々に支援も減っていくと考えられる。今後も継続した支援を実現するため、資金調達を工夫し、一般の方を巻き込んだイベントを企画していきたい。
被災した側、しなかった側がともに学びあいながら隣り合って復興していく、そんなきっかけの場となるよう、親子イベントを企画していきたい。

避難所等にてストレスを抱える児童への小児はりとお見はり保護者への鍼灸マッサージ活動

事業の目的

【支援の対象】

- ・平成30年7月西日本豪雨にて被災した倉敷市・総社市内の児童（就学前児童を含む）
- ・避難所に居住する児童およびその保護者
- ・避難所において支援活動を行う小学校職員等

【解決したい課題】

- ・避難生活を余儀なくされている児童のストレスを、小児はりによって緩和する。
- ・鍼灸やマッサージにて避難児童の保護者および避難所全体のストレスを緩和する。
- ・上記施術の際に傾聴を行い、被災による苦しみを和らげる。

事業内容と活動経過

【事業の内容】

平成30年7月14日～9月15日

- ・倉敷市真備町岡田小学校避難所、総社市昭和公民館避難所等における小児はり鍼灸マッサージ活動
(活動日：8/3,4,5,6,7,8,9,12,19,22,28 9/8,12,15)

平成30年12月13日～平成31年3月31日

- ・「災害支援ネットワーク@くらしき」の支援者会議に参加
(会議日：毎週木曜日18時～)

平成31年2月17日

- ・「まび新春まつり」に鍼灸マッサージブースを出展、小児はり、お灸体験と傾聴活動

事業の成果

ベネッセこども基金の支援をいただき、岡山県倉敷市真備町岡田小学校とその近隣避難所にて、被災避難児童（就学前含む）に小児はり活動を行った。本格的な活動は8月から開始であったが、避難生活による疲労がピークに達していた時期にて、多くの子どもの受療があった。

当活動では、避難所責任者の協力で、支援鍼灸師が避難所に宿

泊できたため、活動を夜間9時頃まで行い、日中は仕事や家の片付けに出ている保護者の施術機会を多く持てた。

「はやく家に帰りたい」という言葉が多く、共同生活を余儀なくされる避難生活で、子どもも気遣いしていることが感じられた。加えて、保護者のストレスも甚大であり、今後の生活再建や子どもの将来への影響を不安に思いながら、被害に遭った自宅の片付けなどに追われていた。

このような状況にあって、子どもや保護者に対するストレスケアの施術活動を行いながら、「傾聴活動」を行えたことで、被害に遭われた方が「苦しい気持ち」を訴える機会となった。

また、この活動が市や社協、各支援団体にも評価され、避難所閉鎖後も被災者の支援にも関わることになり、平成31年2月17日には「まび新春まつり」に参加し、鍼灸マッサージブースを出展、来訪した子どもたちに小児はりを行った。

課題および展望

当初の予定通り、合計14日間の活動が行えた。早期に鍼灸やマッサージ支援が終了した他の避難所から支援要請があったが、当NPOの支援者数もギリギリのため、活動の幅を広げることができなかった。急性期医療支援としての鍼灸活動と、慢性的な避難生活の福祉的支援とは分別して活動継続していくよう、他の鍼灸支援団体に活動継続を呼びかけるべきであった。

現地コーディネーターも他に仕事を持っており、毎日避難所に足を運べなかった。大規模な災害では、コーディネーターを複数配置すべきであったが、当NPOの体力では難しかった。

真備町被災地域へ住民が帰還するには時間がかかりそうである。仮設住宅での生活が長期になると、保護者の育児負担も大きくなるのが懸念される。今後は学童保育や子ども食堂、教育支援といった親子の居場所作り活動が必要になってくることが考えられる。当NPOとしても、避難所における急性期支援だけでなく、子どもが笑顔で戻ってこられる真備町の復興に携われるよう、今後も支援団体のネットワークに参加していくことにしている。

お子さんにこんなトラブルありませんか？

- 「赤ちゃんが寝中に荷物もおきて、ワウワウです」
- 「ママが泣いて、どうしたらいいのかわからない」
- 「アトピーのかゆみがひどくて、可哀そう……」
- 「買物や読書会などで、精神状態が不安定になっているようです」

現在巡回中の鍼灸師にご相談下さい

皮膚を優しくなでる施術法「小児鍼」がお役に立ちます

小児鍼って何？ 鍼ささないの？

小児鍼は大人用鍼の半分程度で、顔・手足、

痛くないので安心です。また、

鍼灸師が優しくお灸を灸いて、

気持ちよくお灸を灸いて、

気持ちよくお灸を灸いて、

気持ちよくお灸を灸いて、

気持ちよくお灸を灸いて、

NPO法人 鍼灸地域支援ネット



避難所巡回用チラシ：8月の活動で避難所内に配布したチラシ



避難所施術風景：子どもの施術時は保護者との対話などで撮影が困難であったため、大人の施術時の状況を撮影。

まび新春まつり：避難所での活動から仮設・コミュニティ支援に移行し、真備町での住民支援イベントに参加。

親子・カップル・みんなで学んで体験し 命を育む支援事業

◎ 事業の目的

過去に経験したことのない甚大な災害に遭遇した心の傷は大人も子どもも大きい。大切な人を失った人、今まで生きてきた証、頑張ってきた家や物、思い出までもなくした人達に、寄り添い支援活動を行う。脈々と繋がれている命について学び、自分の命や他人の命を大切に家族の絆を深め、これからの生活をより良いものにしてもらうために、子育てイベントや学校で性教育や命の出前授業で、妊婦体験ジャケットを着用して妊婦の大変さを学習する。また赤ちゃん人形を抱っこして命の重みを知り、命を生み育てることの大変さを理解する。

◎ 事業内容と活動経過

① 授業の実施

県内の小学校から高等学校まで性教育や、人権学習、いのちを育む授業を実施する。

② 岡山市プレパパ応援事業

11/17、18、12/8、9の計4回 167組のカップル・夫婦が参加。

③ 岡山市いいお産の日

11/23 これから出産する妊婦とその家族、出産した親子とその家族180人が参加。

④ はぐくみ岡山「おぎゃっと21」

10/13、10/20の計2回 助産師会のコーナーで妊婦体験や赤ちゃん抱っこ、ベビーマッサージ、相談など1,225人が参加。

⑤ ベビーケア応援事業

9/5、1/27 33組の夫婦が参加する。主にパパを対象とした講座でパパがベビーマッサージ、衣服の着替えを実習する。ママは美容師にメイクをしてもらい癒しの時間を過ごす。

⑥ サンデーサポート事業

第2、第4日曜日に母と子、家族の支援を実施。30人が利用。

◎ 事業の成果

命について考え、家族の絆を深め、これからの生活を前向きに捉えられるような機会を提供してきた。赤ちゃん人形を抱いて子どもが小さい頃の話が家族で楽しそうに話をする。聞いている子どもも嬉しそうだった。妊婦体験ジャケットを夫が着用して「重たい、これは大変だ、家事を手伝う」と妊婦の妻をねぎらっている光景に、成果はあったと思われる。

◎ 課題および展望

被災者は仮設住宅や、みなし仮設住宅で生活している。被災地では新築間もない家を重機で解体している。再建に向けて動き出しているが災害前の状態になるには時間がかかる。イベントや癒しのサロン、講座を企画して大人にも支援をしていきたい。子どもたちには命の重み、大切さを伝え、自分の命を大切に、他人の命を大切にすることができるようアプローチをして、いじめや自殺の予防になれる支援を今後も継続していく。



「おぎゃっと21」のイベント：妊婦体験コーナーで、女子高校生が体験する。将来ママになるのが楽しみだ。



「おぎゃっと21」のイベント：赤ちゃん人形を抱っこして赤ちゃんは重いと照れる男の子、平気だよとお澄ましする男の子。



ベビーケア応援事業：ベビーマッサージと衣服の着せ方を実習するパパ。

MABI STUDENT FES

◎ 事業の目的

西日本豪雨で甚大な被害を受けた岡山県倉敷市真備地区の中学生の数は約600人。一時、真備を離れての学校生活を余儀なくされたが、10月になり真備・真備東中学校共に真備地区での学校生活を再開させた。しかし、2校が同じ校地で一部プレハブの校舎、スクールバスでの登下校など、日常の学校生活が取り戻しているとは言い難い状況で、文化祭など、生徒たちが楽しみにしていた学校行事もほとんど行っていない。そこで、被災していない高校生有志を中心に、真備の中学生たちに「文化祭のような1日思いっきり楽しめる場」を提供する。

◎ 事業内容と活動経過

2018年12月22日(土) 10:00～17:00、岡山県倉敷市にある大型商業施設「アリオ倉敷」の屋外ステージを借り切って、MABI STUDENT FESを行った。運営は、一般社団法人SGSG内にある高校生自主活動グループ「#おかやまJKnote」が主体となり、大学生ボランティアなども加え、68名のスタッフで行った。コンテンツはステージの部とブースの部に分けて企画した。

ステージの部では午前岡山ローカルアイドル「sha☆in」ライブを皮切りに、同じく岡山出身のお笑い芸人「ウエストランド」の漫才、真備の中学生との合同ステージ、真備陵南高校の活動紹介、東京からのゲストとして「駄菓子屋ROCK」のライブを行った。午後は、真備の中学生による企画ステージ、#おかやまJKnoteによる企画ステージを行い、クライマックスとして、NPO法人チャリティサンタの協力で、クリスマスプレゼントを配る企画を行った。

ブースの部では、真備の子対象の無料駄菓子バイキングや、復興支援チャリティグッズ販売、アート系のワークショップ、を行った。事業実施にあたり、8月下旬から関係者の合同ミーティングを4回、高校生のミーティングを15回行った。また、2019年2月16日(土)に岡山シンフォニーホールにおいて報告会を行った。

◎ 事業の成果

真備の小中学生239名、一般1,115名が会場に足を運んだ。当初の来場者目標は真備の小中学生300名、一般1,500名であったので、若干到達しなかった。その要因として、前日からの天候不順のため、一般来場者の足が鈍ったためと、真備中学校・真備東中学校で午前中個人懇談が行われていたこと、菌小学校で終業式が行われていたことなどの学校行事との重なりもあって、真備の子どもの参加者数が伸び悩んだ。

イベントの告知方法として、真備の小中学生対象のチラシを2,500枚、一般向けチラシを1,000枚作成した。また、SNSの告知としてツイッターを活用し、11月20日から12月22日まで51回の発信を行い、92,144回掲載された。また、事前告知として山陽新聞、読売新聞、FM岡山、RSKラジオ、岡山放送に取材された。

当日は、NHKがイベントを全国ニュースとして紹介し、また、共同通信が全国に配信したことにより、全国多くの地方紙の紙面で紹介された。多くのメディアで紹介されることによって、豪雨災害の復興支援というテーマにいまいちど光をあてるという効果が見られた。

来場した真備の中学生の満足度も高く、「ひさしぶりに友達とのんびり楽しめた」「お笑い芸人といっしょにステージに上がって有名人になった気分になれた」というようなコメントを多くもらった。

◎ 課題および展望

真備地区の小中学校でのチラシ配布がスムーズに進まなかったり、予定していたゲストが直前にキャンセルになったりと、当初の予定通りとはならなかったが、高校生世代が中心となり、復興支援のための大型イベントを企画するという当初の目的は達成された。今回の事業をきっかけに真備地区の中学生の自主活動の輪が広がればと思う。



会場の様子：屋外広場のステージを中心に椅子を100席用意。その周囲にブースを配置した。



お笑い芸人「ウエストランド」のステージ：岡山出身のお笑い芸人やローカルアイドルなどのステージで「文化祭」の雰囲気を出した。



スタッフの集合写真：高校生を中心に、大学生、音響スタッフ、多くのスタッフの手で一体感のあるイベントを行うことができた。

西日本豪雨災害にあった子どもたちの心に寄り添う

事業の目的

子どもたちの心の傷を癒すとともに、災害、防災に対する私たち大人と子どもたちの意識を高め、災害に強いまちづくり・人づくりに寄与していくことを目的とする。

事業内容と活動経過

【おおずで夏祭り】

日時：平成30年8月4日（土）17:30～20:00

場所：大洲神社（愛媛県大洲市）

来場者：約1,500人

【虹の輪まつり】

日時：平成30年8月19日（日）15:00～20:00

場所：喫茶&ギャラリー池田屋裏庭（愛媛県西予市）

参加者：200名程度

【プールへGO! With なんよきっず】

日時：平成30年9月2日（日）10:00～19:00

場所：ウェルピア伊予（愛媛県伊予市）

参加者：小学生50名

【大洲市立肱南保育所支援】

期間：平成30年7月より現在まで

場所：大洲市大洲児童館内肱南保育所（愛媛県大洲市）

参加者：200名程度

【被災地の子どものケア研修会】

日時及び場所

<大洲会場>8月27日（月）19:00～21:00

<松山会場>8月28日（火）昼の部 14:00～16:00

夜の部 19:00～21:00

<宇和島会場>9月10日（月）19:00～21:00

<西予会場>9月11日（火）19:00～21:00

参加者：のべ115名

事業の成果

実際に何度も被災地域に出向き、出会った方たちの声を聴き、「顔の見える、子どもたちに寄り添った、心温かい支援」をすることに力を注いだ。また心のケアの研修会を通じて、実際に被災した子

どもたちだけではなくそこに関わっている、学校関係者、保育所、幼稚園等との連携が取れるようになった。

課題および展望

松山市では豪雨による被害はあったが、南予地方に比べると局地的であったためか災害に対する意識が低いように感じられた。南海トラフ地震の発生も予想されており、今回の豪雨災害とそれに関わる支援を行ってきた団体として、松山市でも災害に対する意識を高めるような活動を行っていきたい。

また、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとの共催事業であるPFA研修や、神戸市で開催された「人道行動における子どもの保護の最低基準」の研修会などを通して、災害時の子どもたちの心のケアを学ぶことができた。それらの学びを実際に南予地方や松山市でも広げていけるような活動も現在検討しており、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとの研修会も企画しているところである。

私たちは松山市に居住しているため、実際に被害の大きかった南予地方の被災者のニーズが把握しにくい部分があった。南予の支援団体等と連携を図りながら被災地で求められる支援を行ってきたところではあるが、今後もさらに連携を深め、また実際に被災地に足を運ぶことで被災地のニーズを把握し、寄り添った支援を行っていきたく考えている。

今後も「顔の見える、子どもたちに寄り添った、心温かい支援」の基本を忘れることなく活動をしていきたい。



おおずで夏祭りfor kids：災害により全ての夏祭りが中止になった大洲市の大洲神社で、子どもたちのために夏祭りを開催。



プールへGo!：大型バス3台をチャーターし、南予を回り小学生50名をプールに連れて行き、プールあそびなどを楽しんだ。



心のケア研修会：「子どものための心理的応急処置（PFA）」を学ぶ研修を行った。

夏休み子ども体験プログラム

◎ 事業の目的

平成30年7月西日本豪雨により甚大な被害を受けた愛媛県西予市在住の小学生の子どもたちが対象。

身近な川から溢れ出る水で恐怖を体験し、日常の遊び場所やその機会を失ってしまい、同時に断水などで水の大切さも経験した被災地域の子どもたちに川遊びを通して、鬱屈とした精神的・肉体的な状態からリフレッシュしてもらおう。それと同時に、同行した経験豊富なインストラクターが川や自然と共に生きる楽しさ・大切さを伝え、皆で一緒に行く、参加型自然体験プログラムを提供した。

◎ 事業内容と活動経過

<体験プログラム概要>

- ・災害ボランティアセンターと連携。専門性の高い技術系ボランティアによる緊急支援を通じて、地域住民と築いてきた信頼関係を基に計画。
- ・突然の被災により避難を強いられたり、また被災前のような川遊びもできず、夏休みの行事や活動に参加できなくなるなど、日常とは異なるストレスを抱える子どもたちを対象に、緊急性の高い支援活動として、参加型自然体験プログラムを企画・実施。

<開催日程>

第1回 愛媛県西予市にて募集。8月2日～3日の2日間。

<参加人数と年齢層>

愛媛県西予市の被災した幅広い年代の小学生の子どもたちが、両日で合計41名が参加。

<体験プログラム実施内容詳細>

- ・高知県四万十市から西予市にバスで送迎、夏の日差しがまぶしい四万十川の河原へアテンド。
- ・流れのゆるやかな四万十川の川辺で、カナディアンカヌーとスタンド・アップ・パドル(SUP)に乗って、水遊びを体験。
- ・カナディアンカヌーに乗って、川の上を自由に行き来した。ライフジャケットを着用した状態で、川の流れに身を任す、飛び込むなど、各々川での自由な時間と遊びを体験。
- ・昼食時は、河原に設営したタープの下で、皆で野菜を切ることから調理を始め、特大の鉄板で炒めた熱々の料理を笑顔と共に喫食。
- ・休憩後は再び水上に戻り、カナディアンカヌーでの川遊びを中心に、存分に楽しんだ後おやつには旬のスイカを切り皆で分け合い、

夏らしい一日を四万十川で過ごした。

<プログラムの告知方法>

- ・被災現場の支援ベース
 - ・これまでの活動を通じた地域のキーマンへの告知協力依頼
 - ・支援団体WEBサイト
 - ・Facebook等SNSを利用したインターネット媒体
 - ・紙媒体のフライヤー配布
 - ・他メディアへのプレスリリース
- など幅広い世代に広まるよう、様々な形で実施。

◎ 事業の成果

被災地域の子どもたちは西日本豪雨のため、夏休みとともに楽しみにしていたプールや夏祭り、花火大会など、季節ならではの年中行事がすべて中止となり、その他イベントへの参加等も難しく、待ちに待った夏休みにもかかわらず、遊ぶ場所と機会を失っていた。そのため、同期間中に小学生を対象に、夏の遊び場として列挙される遊び場・川にてカナディアンカヌーを用いた自然体験プロジェクトを企画開催。

被災後の気晴らしとしても、一般的な夏休みの思い出作り・経験としても子どもたちに大変喜ばれ、水への恐怖心も軽減されたように見受けられた。また、多くの保護者からもとても好評であった。

◎ 課題および展望

子どもたちは自然の中で遊ぶことを通して、自然の成り立ちや環境のことを多く学ぶことができる。その機会を、様々な場所や方法で提供することは、被災したことで負った心の傷を慰め、近年残念なことに天災が続く日本において、防災への意識を若年層に日常的に構築することの手助けとなり、良い契機になり得る。

今後も様々な機会や場所において、特に幼年期から若年層に、自然の中で遊ぶことの大切さを、幅広く広めて行きたい。



【夏休み子ども体験プログラム】①：8月2日 四万十川川遊び



【夏休み子ども体験プログラム】②：8月3日 四万十川川遊び「カヌー」



【夏休み子ども体験プログラム】③：8月3日 四万十川川遊び「カヌー」&「sup」

子どもたちへの心のケア

事業の目的

- ・被災した方々を支援するために、西日本豪雨災害発生直後より、支援物資の収集に努め、受け入れ先確保後、真備地区へ支援物資の提供を実施。
- ・子どものための遊び場作りなどのボランティア活動を実施。
- ・毎年開催している「パピママまつり」に、真備地区ファミリーを中心に招待し、家族で楽しい一日を過ごしてもらうための支援を企画。

事業内容と活動経過

西日本豪雨災害発生直後より、支援物資の収集に努め、受け入れ先確保後、真備地区への支援物資提供。また、子どものための遊び場作りなどでボランティア活動を行った。

- ・チャリティーで定期的に、子どもたちが楽しめるワークショップを開催。その際の講師の交通費を補助。
- ・子どもたちに文具の提供（必要としている内容を事前に聞き希望の品を提供）
- ・子どもたちにマッサージ
- ・今秋開催のイベントへ被災地区家族を招待し、楽しんでもらいたい。

上記の活動をしていく中、パピママまつりで出会った子どもと再会することが多く、「今年もパピママまつりに行きたい」という声が届いている。

真備地区を中心に被災地家族をイベントにご招待し、楽しい一日を家族で共有してもらいたい。そのため・真備地区（その時必要がある場所）へのシャトルバス運行・当日遊べる無料チケット配布・バルーンセレモニーのバルーン無料提供・秋物の子ども用お洋服配布（助成外）などを実施した。

事業の成果

■パピママまつり2018について

- ・シャトルバスを数か所から運行できたことにより、より多くの被災した子どもたちへのサポートができた。
- ・秋冬物の子ども服、ヒートテック、手作りスクールバッグなども配布できた。
- ・金券で親の負担が少なく、子どもたちが思い切り楽しめて、数か月前の日常を感じられた1日になった。
- ・バルーンリリースはこのような状況でも夢をあきらめず未来へ前進する機会をつくり大きな希望を与えることができた。

■被災地（菌小学校中心）のワークショップ

- ・夏休みで行き場のない子どもたちの居場所がつくれて、一時でも楽しいと感じるサポートができた。
- ・交通費を一部負担できたことにより、継続可能となり子どもたちの日常がより多くつくれた。

課題および展望

この活動は子どもたちに夢と笑顔を届ける。

この活動を少しでも長く継続できることが最大の課題であり、展望である。



被災地の子どもたちに1,000円チケットプレゼント：罹災証明を提示の子どもに、当日楽しむためのチケットを配布した際の行列の様子。



バルーンリリース：被災した子どもたちにバルーンを無料配布。みんなで真備地区の復興と未来への夢を願って、大空へバルーンを飛ばした。



無料シャトルバス：仮設住宅などで散らばっている被災者の方たちが来やすいように無料シャトルバスを運行。2019年は真備地区からも運行した。

子どもに笑顔と安心を ～子どもの気持ちに寄り添う継続体制づくり～

◎ 事業の目的

2018年7月に起きた豪雨災害の甚大な被害を目の当たりにした多くの子どもたちの心は、恐怖心と不安でいっぱいになっていると思われる。

そのため、子どもたちの心に寄り添い、心のケアを目的とする。

◎ 事業内容と活動経過

■カード

名刺サイズのカードを作成し、各学校から子どもたちにカードを届け電話番号を知らせた。

8月：被害の大きかった、広島市安芸区、安佐北区、安芸郡海田町、府中町、熊野町、坂町、呉市、東広島市、尾道市、三原市の小学校、中学校。

9月：被災地域の近隣の広島市の小、中学校。

10月：広島県全域の公立の高等学校。

■ポスター

10月末からアストラムラインの車内に掲示し、チャイルドラインを広報。

◎ 事業の成果

カードを子どもの手に届けることは、「あなたを気にかけている人がいる」というメッセージの発信であり、7月初めの豪雨災害発生に対して翌月にカードを届けることができたことは、不安の中にある子どもに対して大いに意味のあるものだった。

被災に関連した内容の電話が、時間のたった11月に掛かっている。「災害のストレスで辛い気持ちが学校で理解してもらえない」といったことであった。8月から順次届けたカードのメッセージを子どもが受け取ってくれた結果であろう。

また、アストラムラインの車内広告（2018年10月～2019年9月）については、電話を利用する子どもだけではなく、大人へチャイルドラインの存在を知らせること、またチャイルドラインが大切にしている子どもへのメッセージについて知らせることにつながり、とても良い広報になった。

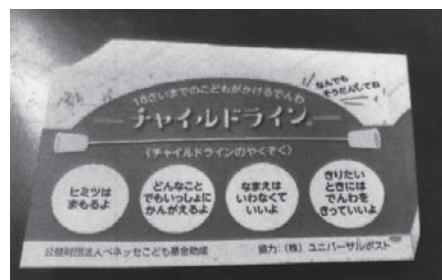
◎ 課題および展望

被災に関連する内容の電話は、発生直後ではなく周囲が落ち着いてきたころに掛かっている。このことを鑑みるに、まだまだ不安な気持ちでいる子どもは少なくない。災害による経済的な不安などを抱える保護者も多いことから、子どもへの目配りが不足することも想像でき、落ち着かない保護者に遠慮する子どもの不安に寄り添うチャイルドラインの活動は重要だと考える。

電話番号を記したカードを複数回届けるなど、メッセージを発信することが大切だと思われる。しかしカードの作成費は当団体にとって大きな費用割合を占めるもので、複数回の配布をするには悩ましいところである。



電話番号を知らせるカード表：広島県内のみつながる特設番号を大きく表示し、オンライン相談へつながるQRコードも表示した。



電話番号を知らせるカード裏：チャイルドラインの4つの約束を載せた。



アストラムライン車内広告：広島市内を走るアストラムラインの車両入り口上部へ、4つの約束と子どもへのメッセージを表示している。

広島県呉市天応地区：被災女性・母子の安全で安心できる居場所作りと心のケア

◎ 事業の目的

広島県呉市天応、安浦地区では、保健師による育児相談や母親たちによる子育てサークルなど、母子を対象とした活動が行われていたが、災害発生後に避難所やその活動場所自体が被災し活動が休止していた。このような背景の中、被災直後に母子が集まれる場所を確保するために、個人が立ち上げた託児所兼遊び場のスペースを継続して運営し、母子が安心して過ごせて遊べる場所を提供する。また乳幼児・子どもの託児サービスを実施しながら、母親へ助産師、保育士、民生委員による育児不安や悩み等の相談やカウンセリング、心のケアを行い、月数回、親子や母親だけで参加できる癒しサロンを開き、「孤立させない」「不安や悩みを共有」する機会を作ることを目的とする。

◎ 事業内容と活動経過

広島県の助産師や育児支援関連団体の協力により、母親や子どもたちが興味を示す内容の癒し交流サロン活動を、天応は9月～10月末まで16回、安浦は9月末～10月末まで4回開催し、442人が参加した。また地元地域との交流を図るため、地域を巻き込んだジョイセフ主催イベント「Mom meets Mom in Hiroshima」を実施し、今後の地域と親子の繋がりを作るきっかけを作った。活動日時、開催場所や活動内容は下記参照。

| 開催日時 | 場所 | 人数 | 開催内容 |
|-------|----|-------|---|
| 9月3日 | 天応 | 親子16名 | 親子が遊べるスペースを展開、支援物資の配布 |
| 9月10日 | 天応 | 母子20名 | 親子が遊べるスペースの展開や託児を実施。支援物資の配布やサロンでしたいことアンケートを実施 |
| 9月14日 | 天応 | 母子26名 | 親子が遊べるスペースを展開、新たな支援物資の配布 |
| 9月18日 | 天応 | 母子22名 | バリスタが導入され、ママたちのお茶会を開催 |
| 9月21日 | 天応 | 母子20名 | マママッサージを開催し、疲れが溜まりつつあるママたちを癒すサロン開催 |
| 9月24日 | 安浦 | 母子22名 | 助産師さんによる育児相談会、ハンドマッサージの癒しサロンを開催 |
| 9月25日 | 天応 | 母子12名 | 親子が遊べるスペースを展開、支援物資の配布 |



天応「子どもお助け隊」：ハーバリウム教室を開きママのリフレッシュサロンを開催。



天応「子どもお助け隊」：5か月～ハイハイする時期の子どもを対象としたベビーマッサージ教室。



天応「子どもお助け隊」：ハロウィンパレード。親子で避難所となった天応市民センターも訪問し、センター長がお菓子を子どもたちへプレゼント。

- 9月27日 安浦 母子30名 子どもたちは体操、バルーン遊び、ママたちはハンドマッサージと育児相談会を開催
- 9月28日 天応 母子20名 ベビーマッサージサロン、助産師さんによる育児相談会実施
- 10月1日 天応 母子12名 親子が遊べるスペースを展開、支援物資の配布
- 10月5日 天応 母子12名 マママッサージを開催し、疲れが溜まりつつあるママたちを癒すサロン、助産師さんによる育児相談会実施
- 10月9日 天応 母子6名 民生委員主催「ふれあい広場」をコラボ開催。災害前から地域に根付いて母子を見守っている方々と子どもの身体測定や育児相談を実施
- 10月12日 天応 母子32名 ハーバリウム教室を開きママのリフレッシュサロンを開催

※上記のほか8回実施

◎ 事業の成果

災害後、有志ボランティアが立ち上げた託児所兼遊び場のスペースが広く認知されるようになり、助成事業が収束した後も、利用者のニーズや要望があり場所を変え被災親子が集う憩いの場を継続していた。現在は天応、安浦地区2か所で呉市出張ひろば事業として展開しており、立ち上げた天応の山本さん、安浦の割方さんがスタッフとして運営に携わり現在も地域の母子をサポートしている。被災後から一緒に支えた方が支援センターの顔となることで、今まで利用してきた母子が安心して利用できる場所として継続している。

◎ 課題および展望

広島2地域の母子と関わり、母子の現状を把握することができた。災害後に地域の文化や慣習がもたらす育児に関する悩みや不安、そして母親が置かれている現状や母子の心のケアサポートを必要とすることがわかった。母親たちが集まり、繋がる場を提供し、お互いの経験や悩みを共有することで辛い気持ちを和らげ、明日を頑張る気持ちを応援するセッションを助産師、保育士、行政と共に連携し実施する必要がある。

内の子も外の子も共に地域の宝 ～祖父母パワーで被災地子ども遊び寺子屋～

◎ 事業の目的

- ① 2018年7月豪雨で被災した広島市口田地区の子どもたちの心の不安や外出の機会のある場として今回の「子ども遊び寺子屋事業」を実施した。
- ② 事業の活動が一過性のものに終わらないために、地域の大人にレクチャーして継続可能なプログラムとした。

◎ 事業内容と活動経過

子どもの遊びを応援する「子ども遊び寺子屋塾」を開催。担い手となってほしい祖父母世代を募集し、様々な遊び方をレクチャーし子どもに「遊び」を教える達人を育てた。塾生が学んだ遊びで被災地の児童館にきた子どもたちと一緒に遊ぶプログラムを組んだ。

日程：11月12日～3月8日 全10回

◇遊び方教室（会場：口田公民館）

- 第1回 11月12日：現代子育て事業と地域活動（講義）
- 第2回 11月19日：クラフト作り
- 第3回 11月26日：スポーツゲーム体験
- 第4回 12月12日：マジック・紙芝居・大道芸体験
- 第5回 1月21日：保育・食育
- 第6回 3月8日：ふりかえり

◇子どもと一緒に遊ぶ実技（会場：口田児童館）

- 第1回 11月15日：児童館の見学
- 第2回 11月22日：クラフト作り
- 第3回 12月27日：マジック・紙芝居・ゲーム
- 第4回 2月28日：食育なぞなぞ・ゲーム

◎ 事業の成果

この事業に参加したトータル人数はのべ1,380人になり、大成功であった。

（内訳 子ども1,200人、大人80人、スタッフ100人）

目的とした地域の祖父母世代の参加者から「今後継続して子ども遊び寺子屋運営に関わりたい」という声もあった。その点からも大きな成果を得ることができた。

◎ 課題および展望

今後の方向性としては、今回の機会を通じて活動のウエーブができたことをしっかり地域に根づかすために、引き続きサポートしていくことが大切であると思う。我々団体もその課題に取り組む所存である。



会議の様子：講師、スタッフの打ち合わせ



児童館にて：児童館にて子どもたちと一緒に遊んでいる様子



クラフト：子どもたちとクラフト作りをしている様子

夏休み星空映画会「実写版忍たま乱太郎」

◎ 事業の目的

呉市内の児童・生徒、保護者、地域の方々全てを対象とし開催。災害時でたいへんな時だからこそ、子どもたちに笑顔でいてほしい、地域の皆さんに元気を出してほしい! 無料開催することで被災されて「映画どころじゃない!」という方たちや、そういった世帯の子どもたちにも少しでも届けたいと考える。

◎ 事業内容と活動経過

「夏休み星空映画会」は、夏休みの思い出に、家族や友だちと夜の学校で楽しく過ごしてほしい、迫力のある大スクリーンで映画を観て、一緒に臨場感を味わってほしい、との思いで30年以上続けている活動。毎年、呉市内の小学校で夜、映画上映を実施、およそ3,000人が鑑賞している。

今年は豪雨災害があり、開催するかどうか大変悩んだが、私たちにできることは、私たち自身が元気をだすこと、そして地域に元気を伝播させていくことだと考え、こんな時だからこそ、子どもたちに笑顔でいてほしい、地域の人たちに元気を出してほしい! という思いから、開催を決定。被災されて「映画どころじゃない!」という方たちや、そういった世帯の子どもたちにも少しでも届けたいと思い、無料開催とした。

また、映画を観て、「楽しかった! またがんばろう!」という気持ちになったら、映画代として払う予定だったお金を義援金にしてほしいと呼びかけもした。無料開催としたが、フィルム代や映写料・広報費用など経費が例年通り必要であり、この度の助成金に応募した。

■呉市内の小学校12か所のグラウンドにて、映画を上映。(いずれも19:30～21:00)

7月20日(金) 和庄小学校・7月23日(月) 横路小学校・7月24日(火) 明立小学校・7月26日(木) 広小学校・両城小学校・7月27日(金) 昭和中央小学校・7月30日(月) 阿賀小学校・7月31日(火) 荘山田小学校・8月1日(水) 呉中央小学校・8月2日(木) 白岳小学校・8月3日(金) 三坂地小学校・8月26日(日) 江田島小学校

■周知はチラシ(呉市内小学校・幼稚園配布)、ポスター、ホームページ、Facebook、子ども会への案内ほか。

◎ 事業の成果

3,205名の方にご参加いただいた。

親子での参加、子ども会での参加があり、毎年やっている活動ということで、楽しみにしていた子どもたちもいた様子であった。例年通りに開催したことが、日常を取り戻す一時にもなったようである。7月末という実施時期については、夏休みにもかかわらず、災害により交通機関が不通のためどこも行けず、映画に行けてよかったという声を聞いた。

また子どもたちに楽しんでもらいたいと無料で実施した趣旨に賛同して支援も少しずつ広がった。

江田島小では、「がんばろう江田島!」を合言葉に地域の人たちと連携しミニ祭りを同時開催。たくさんの方が関わり、子どもも大人も楽しんでいる様子がかがえた。

呉市内小学校での上映の情報を知り、安登小学校と坂小学校の2つのPTAから上映依頼があった。8月末(安登小) 10月末(坂小)の上映に協力することができた。子ども文化活動から子どもたちへの支援の輪につながったことが成果である。7月6日豪雨災害後すぐの、7月20日からの開催であったが無事開催できてよかった。

◎ 課題および展望

子ども、地域が元気になる活動を続けていきたいという会のミッションに照らし、地域の子ども会や親子が参加する夏休みの大事な活動なので今後も継続していきたいと考えている。今回は被災地支援活動、町を元気に! ということで無料開催としたが、経費がかかる事業なので次年度も無料とできないところが課題である。なるべく参加しやすい工夫をし地域の支援協力を得て続けていきたいと考えている。



7月20日呉市立和庄小学校上映会：グラウンドにシートを持って集まり、星が出てきたら上映開始。暑い夏だったが日が落ちると涼しくなってきた。



8月26日江田島小学校上映会：夕暮れの美しい景色も見ながら上映開始を待っているところ。



8月26日江田島小学校：上映会の前にミニバザー開催。「がんばろう江田島!」を合言葉に地域の方の協力でさまざまなテントが出た。

「子ども達の笑顔を守る」プロジェクトの延長戦！点から面の支援で地域の元気へ ～みんなで遊ぼう！考えて動いてストレス発散&免疫強化&防災・減災学習！～

◎ 事業の目的

広島県では河川の氾濫による浸水被害や土砂崩れが相次いだ。災害後、子ども達が遊んでいた公園や空き地は、がれきや土砂の仮置き場になり、土砂崩れで流れてきた木片が生活圏内に散乱している状態が続き、安心して遊べる場を奪われた子ども達はストレスを抱えていた。子どもが能動的に自ら遊びを作り出す場を提供することが急務であると考え「子ども達の笑顔を守るプロジェクト」を発足。親子が安心して集い遊べる場を提供する。

また、広島県では近年、土砂崩れによる被害が増加していることから、森林に関心を持ち減災を意識するきっかけ作りや、記録的豪雨の一因である地球温暖化の防止のため、私たち自身が暮らしの中でできる行動について啓発していく。

◎ 事業内容と活動経過

本事業では、県民のニーズ変化から「被災地域の子ども達が気兼ねなく遊び楽しめる」「非被災地域の子ども達も含めて学び楽しめる」「減災防災に対する市民へ意識付け」と支援のかたちを3段階で捉え、時間の経過と共に段階的に対象を移行しながら実施した。4回の遊び場提供と3回の学習会にて、延べ3,289名の親子に対して遊びと学びの場を届けた。

■土砂浸水の被害が大きかった地域の住民に対し遊び場提供

2018年8月26日「謎解きダンボール迷路遊び」

対象：呉市民（天応地区）来場者数：120名

2018年12月2日「やすうらこどものあそびば」

対象：呉市民（安浦地区）来場者数：100名

■非被災地域の住民も含め遊びの中で減災を意識付ける場提供

2018年12月9日「わくわく親子プレイランド」

対象：東広島市民 来場者数：800名

2019年2月3日「ひろしまババフェスタ」

対象：広島市民 来場者数：2,220名

■土砂災害や森林環境の学習会

2018年12月16日「木遊びから考える森林の仕組み」

参加者数：14名

2019年3月23日「土砂災害の影響と海の生物学学習会」

参加者数：19名

2019年3月31日「森林環境を知る木育学習会」

参加者数：16名

広島県産木材を活用した積み木遊び、ダンボール迷路、発表会などを、地域の子育てサークルや学生、行政と連携し開催。親子で楽しめるイベントの中に、謎解きやクイズを組み込み、私たちが暮らしの中でできる地球温暖化防止活動に対する働きかけや、パネル展示による減災に対する啓発を実施した。

◎ 事業の成果

各地域で子育て支援等を行われている団体と連携することにより、3,000人を超える親子に参加していただき、子どもたちが活き活きと遊ぶことができた。参加された保護者からは「親子で楽しめるイベントでよかった」「親同士が情報を共有する場になった」「木の素材はさわり心地もよく遊び方が無限で想像して遊べた」「木の香りや音がよかった」などの感想をいただき、土砂災害の木片流出という木に対する怖い印象から、木と親しみ良さを知る機会を作れたと感じる。

また、多くの子育て世代にクイズや積み木、パネルによる啓発を実施することで、私たちの暮らしと自然（環境問題）の関係性や、現在の人工林（放置林）の課題などを理解してもらえた。

非被災地域の住民も対象とした東広島市や広島市の事業では、災害により発表会の中止が相次いだ中、子ども達の習い事の成果を披露する場を設けることで、子どもの自尊心を高める機会に繋げることができた。

◎ 課題および展望

今後も、本事業を継続的に実施する中で、「減災に対する意識付け」を“子育て”“森林環境”“地球温暖化（省エネ）”を軸とし、遊びの中から啓発を行っていく。「木育」を手段とし発信者を育成することで、参加者が親しみやすい事業の中から啓発に繋げていきたいと考えている。



東広島市わくわく親子プレイランド：広島県産木材で製造した積み木遊びや子育てサークル等の発表会。



啓発パネル展示：お菓子つかみ取りクイズにて、パネル内にヒントを入れることで展示を見てもらう工夫をする。



木育学習会：森林環境における減災意識啓発のため、木育を通じた発信者育成プログラム作り。

平成30年豪雨災害で被災した大洲市の ママへのトータルケアプログラム

◎ 事業の目的

■被災後自宅に戻れたとしても、児童館・保育園が機能しておらず、そのため親子は行き場をなくしている現状。安心安全な場所で運動できる機会・ストレス軽減・同年代の親子が集まるコミュニティ作りが必要である。

■産後は心身ともに不安定になりやすい時期である。豪雨災害を受け安心安全の確保すら十分でない環境において、周囲に気遣いながらの育児は大きなストレスになることは明白である。その中で体と心のケアは絶対的に必要である。

◎ 事業内容と活動経過

■問題を解決するため、親子向けバランスボールレッスンを実施。大洲徳森児童センターと大洲児童館にて月1回開催した。参加者の身体と心に有酸素運動を用いたメンタルヘルスケア。及び、保育士や市職員などケアする側の人のメンタルヘルスケアを行った。

■更なるケアとして産後トータルケアクラスの開催。産後女性の体づくり、身体の不調のセルフケアのレクチャー、ワークを用いた心のケアである。これを、体験会、振替日も含めて週1回、計8回実施した。

◎ 事業の成果

■Act For Nanyo Kidsより紹介いただき、徳森児童センターにて支援させていただけることが決定。加えて大洲児童館にも協力を得ることができ、親子向けのバランスボールレッスンを月1回ごと継続開催することができた。毎回20名強の親子に参加いただき、バランスボールを使った有酸素運動での体づくり、自律神経を整え気力アップ、ストレッチによる緊張感の緩和やヒアリングなどを行い母親の身体と心のケアを行った。

■母親への更なるケアとその子どもたちへの支援として、産後トータルケアクラスを2月1日より倉谷施術院多目的ホールにて開催。児童館でのレッスンに通ってくださった方々を中心として参加いただいた。豪雨災害前後の大変な状況で産後をむかえココロもカ

ラダも不安定になりがちだったが、体力が付き気力が上がっていく中ワークにてメンタルケアなどを行えたことで、母親が未来を見据えて前向きな考えが持てるようになった。

■Act For Nanyo Kidsから大洲児童館に避難している肱南保育園への支援を紹介いただき、保育スペースや遊ぶ場所が限られた環境の中で過ごす園児たちの運動不足解消、体づくりを行った。

◎ 課題および展望

■引き続き大洲の児童館2か所にてバランスボールのレッスンを継続開催できることになり、母親とその子どもたちの健やかなカラダ作りや精神的な安全を支援することができると考える。

■産後トータルケアクラスに参加された方の中からバランスボールインストラクターに興味を持たれる方が現れ、養成講座を開催することが決定。四国各県から支援に向かっていたが、現地にて継続的な支援ができる体制をつくることができた。さらには産後のママの不安定なカラダとココロをケアする産後トータルケアクラスを開催できる体力指導士と産後指導士を養成し、より細かな支援へとつなげていきたいと考える。



児童館での親子向けバランスボールレッスン：0歳から3歳の子どもの母親にたくさん参加いただいた。



産後トータルケアクラス：産後女性の身体と心をつつとにケアすることができた。



愛媛新聞掲載記事：2019年3月19日付で産後トータルケアクラスについて掲載された。

倉敷市岡田小学校の教育活動正常化にかかわる支援活動

◎ 事業の目的

本事業の目的は、倉敷市立岡田小学校において、

- 1) 2学期の授業を円滑に進めることができるような校内環境の整備を行うこと
- 2) 以降の学校の教育活動を可能な範囲でサポートすることの2点である。

◎ 事業内容と活動経過

第一次学校支援(2018年9月20日～25日)上記1)の目標を達成するために行った。

具体的には、5～7名にわたるチームを3班編成し、各班2日間にわたって(第1班20～21日、第2班22～23日、第3班24～25日)現地で主として肉体労働に従事した。この時点ではまだ体育館には数十名の方が避難しておられ、岡田小学校の教頭先生および学校に設置されているボランティアセンターのリーダーの指示を受けながら、主として肉体労働に従事した。従事した活動の中身は、以下のようなものである。体育館の掃除、畳等の移動、パイプ椅子・スリッパの消毒、グラウンドの土入れ、校舎の掃除・窓ふき、側溝の整備など。

9月も下旬に入っていたものの、炎天下での作業はなかなかハードなものであった。とりわけ車両の頻繁な出入りによってかなり「荒れ」が目立つグラウンドを整備するために行った「土入れ」は重労働であり、きつい作業となった。しかしながら、子どもたちが安全に遊んだり、体育の授業を受けたりするためにという説明を受けていたために、学生たちのモチベーションは高く、困難な仕事をクリアすることができた。

第二次学校支援(2019年2月3日～15日)上記2)の目標達成を目指して実施した。

具体的に行ったのは、各学年・教室で行われている算数の授業へのサポートである。今回は6～7名からなるチームを4班編成し、各班2～3日間にわたって(第1班4～6日、第2班7～8日、第3班12～13日、第4班14～15日)子どもたちの学習支援に従事した。当初は卒業を控えての6年生の支援をしてほしいという学校側からの要請であったが、どうせやるならということで、全学年の算数の授業を対象とすることとなった。班員たちは授業に入りこ

み、算数が得意でない子どもたちを中心に計算やドリル学習のサポートにあたった。

第一次の支援ではあまり子どもと直接接する機会はなかったが、今回(第二次)の支援においては、ふんだんに子どもたちとかわることができ、メンバーも大いに満足することができた。学生たちを快く受け入れてくれた岡田小学校の先生方には深く感謝申し上げたい。

◎ 事業の成果

本事業では、上に述べたような二次にわたる支援活動を実現できた。

第一次においては、収束期に入りつつある避難所(体育館)と2学期の教育活動が佳境に入りつつある学校の物理的環境の改善に対して、一定の貢献をなすことができたと思う。グラウンドの土入れ作業を完遂したのがその象徴である。

第二次においては、大学生たちの本領を生かす学習支援活動を組織することができた。子どもたちは集中豪雨の影響でほぼ2か月(7～8月)、学習に向かえない時期を過ごした。勉強が不得意な子どもにとってそれは大きなハンディキャップになっており、算数の授業においても簡単な計算に苦勞する子どもたちの姿が散見された。わずか2週間という限られた時間だったが、計算に自信をつけ、学習意欲を向上させることができた子どもたちの姿を見られたことは、私たちの大きな喜びであった。

◎ 課題および展望

本事業での活動はこれでひと区切りとなるが、岡田小学校との間にできたご縁を大切に、今後も学校側の要望があればボランティアチームを編成し、支援活動に従事したいと考えている。



グラウンドへの土入れ作業：授業や休み時間にグラウンドが使用できるように、土入れ作業を行った。



休み時間における九九学習の補助：基礎的な計算力を身につけるための九九の暗唱テストを手伝った。



授業中の個別指導：授業中の演習課題につまずいている子どもや算数が苦手な子どもに対して、個別にサポートを行った。

災害地での子ども参加型花火大会の実施

◎ 事業の目的

支援対象：広島県安芸郡坂町小屋浦の子どもたち
小屋浦の子どもたちは、通常の花火大会が災害および次に来る台風で中止になり、夏休み直前に起こった災害ということもあり、夏休みに全く遊ぶことができないばかりか、辛い体験をし、避難所暮らしが続き、心の負担が大きかった状態だった。子どもたちのPTSDは直接の被災体験だけではなく、その後の辛い経験でも発症する事が報告されている。そんな被災地の子どもたちに通常の夏を味わってもらい、心の負担を軽くしてほしいという想いで活動した。

◎ 事業内容と活動経過

2018年8月14日 広島県安芸郡坂町小屋浦の天地川公園にてキャンドルナイト&花火大会を実施

当日は玩具花火の専門家の指導の元、打ち上げ花火を組み合わせ、本格的に約3,000発の打ち上げ、手持ち花火は約1,000本を子どもたちに配りました。

当日は120人ぐらいの子どもたち、大人も合わせると約200人の住民が会場に来て盛り上がりました。子どもたちや住人の方々からは「災害のあと、こんなに楽しんだの初めて」

「本当にありがとうございます!ありがとうございます!」と何回も声をかけられた。

また、子どもたちは久しぶりに集まった友達との交流も楽しかったようで、当日のNHKのインタビューでもそのように答えていた。住民の満足度は非常に高かったと自負している。

7月20日～7月28日 事前現地打ち合わせ、および下見のため小屋浦出張

8月5日～8月12日 盛岡の当法人事務所にて事前準備

8月13日～8月18日 本番および本番のための出張

◎ 事業の成果

発災以後、遊ぶことが全くできず、大人も構ってやることができず、とてもつらい状況にあった子どもたちに、遊びを提供し、心の負担を軽くすることができた。

また久しぶりに集う子どもたちおよび住民の交流の場になった。

◎ 課題および展望

子どもたちの心のケアは、一度だけでなく、継続的な支援が必要です。今後も機会を見つけて、子どもに遊びの提供、心のケアを考慮した企画の実施を行っていく。



キャンドルナイトの様子:キャンドルで「心」の文字を作った



手持ち花火に夢中:子どもたちは沢山の手持ち花火に大喜び



3,000発の打ち上げ花火に夢中:住民のみなさんから歓声があがった

7月豪雨災害により被災した子どもたちへの 支援情報の集約と発信事業

事業の目的

7月に発生した豪雨災害により多くの児童生徒が被災してしまった。特に倉敷市真備町や矢掛町を中心とした小学生、中学生、高校生が多く被災しており、その支援が急がれている。被災後、行政や民間、企業、個人など多くの人が子どもたちへの支援を開始したが、被災した子どもたちが多方面に避難していることもあり、それらの支援が当事者にしっかりと届かない状況があった。また、被災した子どもたちが多くことと、子どもたちと括るために漏れてしまう中高生の存在も多く、まだまだ支援が足りていない現状も見られた。そのような中、現場でのニーズは刻々と変化しており、現場の支援団体と連携した情報収集と発信を誰かが行い、適切な情報を適切なタイミングで届けていく役割を担う必要があった。同時に行政（教育委員会）が学校再開に追われ、支援にまで手が回らない中で行政と現場と支援者をつなぐ役割も必要となっていたため、それらの緊急的な課題を解決することを目的に活動を行った。

事業内容と活動経過

1. 支援情報の収集と整理

- 被災した子どもたちへの支援情報を収集し、専用のWebサイトにて整理公開した。
- 支援情報の収集は、災害支援ネットワークという支援組織と連携することと、SNS等を用いてその必要性と役割を担うことを伝え、集めることで集約化を図った。

2. 情報の発信と啓発

- Webサイトを一般に公開すると共に、発信は、SNS等での関係者周知に加え、倉敷市教育委員会と連携し、被災した保護者等へのメール配信も同時に行い周知した。
- また、地元メディア等での発信により一般県民にもその必要性や存在を啓発した。

3. 支援シーズと現場との連携サポート

- 行政や大学、NPO、民間教育関係者などが連携して協議する連絡協議会に参画して、情報交換と情報周知の迅速化、それに現場への大学生連携などをサポートした。

※上記に加え、紙媒体にサイト情報および官民学の支援情報等を整理して教育委員会と連携して被災生徒家庭に配布することも



情報発信サイト「うったて」子ども特集：発災直後から子ども向けの支援情報を収集し、発信していった。

検討したが、刻一刻と変わるニーズの中で、紙媒体が必ずしも行き渡らないことやニーズが少なかったことからその活用は見送ることとした。

事業の成果

- 発災直後から子どもたちの居場所情報や支援情報を発信しマッチングを行った。
- 8月14日から8月29日までのアクセス分析ではページビュー数は、3,425PVであり、最低限ではあるが、子どもたちに支援情報を届け、マッチングを行うことができていた。
- 情報伝達としては、主に行政からのダイレクトメール（連絡網）とフェイスブックやLINE、TwitterなどSNS経由での情報伝達が行き届く結果であり、素早い連携体制が功を奏した部分があった。

課題および展望

- どうしても人的に限界があり、情報収集は受け身となり、SNS等での発信が主となった。そのため、最低限の情報を収集し、被災した家庭に届けることはできたが、小さな支援情報をリアルタイムにどこまで発信できたかと言えば十分ではなかったと思われる。
- また、行政メールやSNSだけでは届かない被災者も少なからず存在していて、発信先のチャンネルがもう少しあってもよかった。
- 様々な情報を有機的に繋ぐハブ機能の役割を担うことを目指したが、本業の事業を遂行しながら片手間で担うには、十分にできない部分も多く、課題を感じながらの取り組みではあった。そのため、今後の展望としては、このような緊急時にもすぐに動ける余裕ある体制を構築したいと強く思った。具体的には、ボランティアを活用した情報収集と伝達の仕組みを人的なつながりと共に持つことをしていきたいと考えている。

小さな勇者を応援しよう！！ 水害に立ち向かった子どもたちへ

事業の目的

- ・西日本豪雨以降、居場所をなくした子どもたちを支援対象とする。
- ・居場所をなくした子どもたちが前に進む力を手に入れる支援として遊び場、学びの場を提供するものである。
- ・子どもの心に寄り添う体制を忘れずに、無理強いをしない。
- ・被災状況を見てすさんだ心のケアを急務とする。

事業内容と活動経過

- ・子ども用品無料フリーマーケット開催(全国からの支援品で開催) 手作りコインで文具やおもちゃ、子ども用品を選び、この夏頑張った子どもへ保護者から手作り賞状を渡し、改めてお互いの大切さを確認できた。集まった子どもたちと読み聞かせ、子ども食堂、スポーツレクリエーションを楽しむことができた。
- ・バス遠足(車がない親子も遠くへ足を延ばせた) ガラス工房と温水プールへバスで出かけた。車内では、どこにも行くことができなかった話や、この企画がありがたいとの意見が多数あった。小さな声で話していた子どもも帰るときには、大きな声で「ありがとう。楽しかった。」と言っていた。
- ・電車遠足(小さな子どもも楽しめるよう水族館を行程に加えた) 電車で安芸の宮島に行き、郷土のしゃもじ作りやもみじ饅頭作りを行った。どの子どもも笑顔で親子で楽しんでいった。宮島水族館へ立ち寄りバックヤードガイドも楽しむことで郷土をより大切に感じる事ができた。

事業の成果

- ・元気がなかった子どもが、イベントに馴染み、みんなで遊ぶ姿がみられた。
- ・最初は暴れるそぶりをみせていたような子どもも、だんだん、この場所は守らなくては持続できないことがわかり、泣きながらけんかをやめる姿が見られた。
- ・広域の被災地でも知り合いが増えて活動が広範囲にわたってできるようになった。
- ・何もしてあげられなかったと感じていた保護者が、自分のできることをまずやろうと、このグループの活動を手伝ってくれるようになった。

課題および展望

- ・仮設住宅、みなし住宅、リフォーム中、被災地域だが被災していない子どもたちが、わけへだてなく集まっていける場を作る必要がある。
 - ・いまだ、手つかずの住宅や農地もある中、子どもたちへの日常の声かけ等行う必要がある。
 - ・夏場のイベントには、豪雨へのトラウマがある子どもへの配慮が必要である。
 - ・また、災害が起こるかもしれないという恐怖を防災を通じて和らげなくてはならない。
 - ・イベントの安全性と安心には引き続き注意を払う必要がある。
 - ・イベント参加者から、これからの活動にボランティアとして参加したいとの申し出が3名あった。
 - ・グループ内で防災士の資格取得者が出たので防災講座を開講する。
 - ・防災講座は、広く募集し様々な地域で様々な活動を行うことができそうである。
 - ・行政や、民生委員、地域の自主防災会と共存していけるように話し合いをしている。
 - ・防災講座は、国土交通省、気象庁、消防、警察、自衛隊の出前講座で、市民と行政を結ぶ講座にする。
 - ・防災講座にて、やる気のある子どもには、防災キッズとして次年度の後輩を育成する役割を与える。
 - ・防災遠足として、遠足を楽しみながらも各地の防災センターなどで学ぶ機会を取り入れる。
 - ・防災キッズから要請があった場合は防災士としてその地域の安全マップを作成する。
 - ・半年の活動で、様々なボランティア団体と連携でき、これからの連携も期待できる。
- 読み聞かせ・スポーツレクリエーション・子ども食堂・防災士・避難啓発のドローン撮影・消防団・カフェボランティア・看護師・保育士等有資格者や団体と活動することができる。



無料子どもフリーマーケット：全国からの物資を買い物方式で配布、読み聞かせや賞状、こども食堂を併設した。



ガラスの里・温水プール遠足：ガラス用品を作る体験、温水プールで楽しい遠足となった。



宮島しゃもじ・もみじ饅頭作り、水族館遠足：郷土の名産品と親しみ、広島ならではの水族館のバックヤードも見学した。

プレーパーク活動による子どもの心のケア ～子どもが「遊び育つ力」を育むことを支える遊び場づくり～

◎ 事業の目的

被災地の方々、特に子どもの「心のケア」を行うために、専門性のあるプレーワーカーの中でも、東北や九州の震災後の子どもたちの心のケアの経験ある人たちに来てもらい、子どもの自由な遊び場プレーパークの開催日数を増やす。

◎ 事業内容と活動経過

被災地の方々、特に子どもの「心のケア」を行うために、専門性のあるプレーワーカーの中でも、東北や九州の震災後の子どもたちの心のケアの経験ある人たちに来てもらい、子どもの自由な遊び場プレーパークの開催日数を増やすことができた。

【実施日】

7/15(日)・8/11(土) 12(日)・9/15(土)～17(月・祝)
10/7(日) 8(月・祝)・11/17(土) 18(日)・12/15(土) 16(日)
1/19(土) 20(日)・2/16(土) 17(日)・3/23(土) 24(日)

【場所】

酒津公園

◎ 事業の成果

専門性のあるプレーワーカーの中でも、東北や九州の震災後の子どもたちの心のケアの経験ある人たちに来てもらい、子どもの自由な遊び場プレーパークの開催日数を増やすことができ、被災地の方々、特に子どもの「心のケア」を行うことができた。また、子どもの元気に遊ぶ姿や笑顔を見ることで、大人も元気をもらっていた。一過性のイベントは事前申し込みが必要だが、プレーパークは事前申し込み不要で、開催時間内いつ来ていつ帰ってもいいので、隙間時間で顔なじみの人に会いに来て、情報交換や近況報告ができることを喜ばれている姿を見ることができた。

また、次世代を担うスタッフも専門性のあるプレーワーカーと現場を一緒にすることで、多くの学びがあり、次に生かすことができる。

◎ 課題および展望

【今後の課題】

通常の生活に戻るには、まだまだ時間もかかると思われるので、息の長い支援が必要。

ベネッセこども基金は、実施団体スタッフの件費も申請可だったが、補助金や助成金や寄付金は、認められていない。今後、当会スタッフの件費、交通費の捻出が課題。

【今後の展望】

- ①2019年度「平成31年度岡山県備中県民局提案型協働事業」に、採択されたので、真備町川辺地区にて、遊び道具を積み子どもとペイントした車プレーカーで、月一回プレーパークを開催する。
- ②倉敷市子育て支援課主催の真備子育てcaféに月一回参加している。川辺まちづくり推進協議会の中にプレーパークが欲しいと声が上がっているので、一緒に考えて行きたい。
- ③2019年度「フィランソロピーバンク寄付金」で、酒津公園で真備の子どもたちとキャンプを実施する。



超特急リヤカー：学生のお兄ちゃんたちのリヤカーは早い！早い！子どもたちに大人気！



ハンモックブランコ：学生が初めてハンモックを設置。高くなり過ぎ四隅のロープでブランコにしたら大人気！



ペイント：布や端材に絵の具を塗った作品は、自分だけの宝物！筆を洗うバケツは色水遊びに変身！

三原市本郷地区における 子どもの居場所づくりと母子サポート事業

◎ 事業の目的

平成30年7月豪雨において広島県三原市は、河川の氾濫・大規模な土砂崩れによって多くの家屋が全半壊の被害を受けただけでなく、長期の断水、教育機関や給食センターも被害を受けた。現在も給食はお弁当で代用、保育園は園児が何園にも分散して通園するなど非日常の中で生活を送っている。

今も雨が降ると「また家が流れるよ」という精神的な不安を口にしたたり、一変した生活に疲れている大人たちの精神状態から不安定になる子どもたちが多い。

本事業においては、以下を目的とする。

1. 平成30年7月豪雨で被害を受けた三原市内、特に本郷地区の子どもたちと子育て中の親を対象に遊びを通しての心のケアを行う。
2. 生活再建のための支援活動を行い、安心して暮らすことのできる町の再生を目指す。

◎ 事業内容と活動経過

1. 遊ぼう会ぶらすは発災直後より子どもたちの居場所、自由な外遊びの場「ふなき発見きち」を立ち上げ、2018年8月～2019年3月まで計9回開催。遊びを通して豪雨災害による環境の変化で不安定になっている子どもたちの心のケアを行った。
2. 大人たちがコーヒーを飲みながら情報交換や相談のできる場を提供する目的で、出張カフェ in 船木を広島県廿日市市のcafé 柿尾坂さんの協力を得て計7回開催した。
3. 11月にNPO法人日本冒険遊び場づくり協会の災害支援チームより講師を招き「災害時の食と子どもの心のケアを考える」をテーマに災害後の子どもの変化と居場所の必要性について地域住民とともに学ぶ講演会を開催した。
4. 12月に放課後子ども教室、その他船木地区の小学生を対象に、子どもにはクリスマスケーキや手作り品、保護者にはお米のプレゼントを行った。
5. 食事支援として2018年10月～2019年3月まで毎週木曜の放課後、旧船木小学校で行われた放課後子ども教室に通う子どもを対象に、パンと飲み物の支援を行った。
6. パン教室 被災した子育て中のお母さん、食物アレルギーの子を育てるお母さんを対象に、親子で参加できる手作りパン教室を2018年11月と2019年1月の計2回開催した。



「ふなき発見きち」：試行錯誤しながら何度も七輪でべっこう飴作りに挑戦する子どもたち



出張カフェ in 船木：発災後1か月あまりで初開催したカフェでは、子どもたちに手作りパンが振る舞われた。



パン教室：アレルギーの会の親子が参加したパン教室では、食物アレルギーの子にも対応したレシピを使用。

活動の案内や活動の様子の発信には、遊ぼう会ぶらすのホームページ、フェイスブック、船木地域支援センターや地域の子育てサークルの連絡網などを活用した。

◎ 事業の成果

1. 「ふなき発見きち」を定期的で開催したことで、繰り返し遊びに来る子どもが増えただけでなく、一緒に楽しむ大人たち、準備や場の見守りをサポートする地域の高齢者も増え、多世代で交流することができた。「子どもたちの居場所」「冒険遊び場」を体感した人たちが11月の講演会でさらに「ふなき発見きち」の意義を理解し、場の必要性を感じるようになった。
2. 出張カフェやパン教室では、被災者同士の交流だけでなく、カフェオーナーや講師との関係も深まり交流の輪が広がった。
3. 子どもたちへのパンやクリスマスケーキの提供は、被災によって多くの家庭で台所が使えない状況を考慮したことで、保護者の負担を軽減することができた。

◎ 課題および展望

本事業の活動を続ける中で、休日や放課後にも多くの小学生が校庭で遊ぶようになった。運営者と子どもたちとの関係性も形成されつつあり、災害という非日常から日常に戻っても、本当の意味で「子どもの居場所」になるために活動を続ける必要がある。今後雨の多い時期になると子どもの不安が強まることが予想されるので、雨や台風の多い夏の時期には、「ふなき発見きち」の開催回数を増やし子どもが安心できる居場所として運営する必要がある。開催の日数が多くなると運営メンバーを増やす必要があるので、本事業で深まった地域の大人や高齢者を巻き込んで地域の活動として根付くようにしたい。

遊viva学viva三原

◎ 事業の目的

三原市本郷地域にて被災した世帯の子ども・親支援を目的として実施されている「三原お遊びキャラバン隊」の支援を行うことを目的として本事業を展開。本事業は、地域復旧・復興を目指す被災地域を主体としながら、実行委員会形式により、被災地の子ども、親の心のケア支援および生活支援を行う。また、本事業を通じて、子どもたちへ様々な大人が支えてくれ、応援してくれることの実感を得て、安心・安全を提供するとともに、この経験を通して、将来は自身が地域を支える人財となることを願って実施する。

◎ 事業内容と活動経過

【発災からの経過】

- ・子どもたちは被災後、ストレスを抱えたまま学校が休校となり、夏休みに突入。発災当初、プールは使用不可、林間学校等の行事もない状況。また、広島県内では夏祭りが自粛（やっさ祭り）。
- ・沼田川が氾濫し、甚大な被害が出た船木地区では、家を失った子どもの心のケアを検討する必要あり。また、三原駅付近等への避難世帯もいる。
- ・本郷ひまわり保育所（入所定員数120名）が、3メートル近くの浸水被害にあい、発災当初より休所状態。入所児童は市内の各保育所へ分散。

【事業内容】

- ①本郷西小学校区（南方、北方、船木地区）、木原小学校区における子どもの居場所づくり

| 地区 | 開催日 |
|------|---|
| 南方地区 | 8/5、8/12、8/19、8/26、9/23、9/24、10/28、11/11、11/24、12/22、1/27、2/17、3/17 |
| 北方地区 | 8/7、8/16、8/21、8/23 |
| 船木地区 | 8/10、8/17、8/25、10/25、11/1、11/22、12/6、12/13 |
| 木原地区 | 8/7 |
- ②「三原の子どもたち、小佐木島へ行こう（宿泊キャンプ）」（8/8～9）の企画実施（参加児童：17名）
- ③「2018なつまつりin本郷西小学校」（8/19）の企画実施（来場者：約400名）
- ④「100人でクリーンアップ大作戦！in本郷ひまわり保育所」（9/22～24）の企画実施（参加者：352名）



子どもの居場所づくり「お遊びキャラバン隊in南方」：三原市内の各地域で子どもの遊び場、学び場を開催（写真は南方地区の遊び場）。



宿泊キャンプ：林間学校が中止となり、その代替としてキャンプを実施（小佐木島にて）。



クリスマスパーティー：市内で自粛している冬のイベントの代替としてクリスマス企画を実施。

- ⑤「クリスマスパーティー」（12/22）の企画実施（参加者：413名）
- ⑥「春キャンプ～小佐木島へ行こう～」（3/28～29）の企画実施（参加児童：13名）

◎ 事業の成果

- ・発災後、見過ごされがちとなる子どもの支援について、地元（特に保護者）を主体として展開できた（関係機関、支援団体が側面的に支える構図に留意）。
- ・子どもの遊び場、学び場について、被災したコミュニティごとに設置を試みることができた。これはそれぞれの地域特性に応じてその地域ならではの活動を展開する必要があったからであるが、今後の生活支援を行う視点から鑑みても、生活の基盤となる日常生活圏域を意識した場づくり、機会づくりが重要であることを再確認できた。
- ・できる限り日常を継続、取り戻すことができるよう（日常の継続性）に、中止されていた林間学校、水泳、祭り等を地元の力を活かしながら実施できた（宿泊キャンプ、夏祭り、クリスマスイベント）。

◎ 課題および展望

本事業を通じて、引き続き以下の点を課題として捉え、事業継続を心がけていきたい。

1. 3つの安心感を大切に子どもによりそう
 - (1) 普通でない状況の普通の心の反応を知る安心感
 - (2) 誰かがそばにいてくれる安心感
 - (3) 二度と同じことがおこらない試みを知る安心感
2. 3つの安全感を大切にともに歩む
 - (1) 災害をおこすメカニズムを理解する安全感
 - (2) 災害に備える方法を知る安全感
 - (3) 災害に対応する（判断ができるようになる）安全感
3. 教訓や思いを語りつぐことを大切にする
4. 災害から心を守る方法など、ストレスマネジメント、心理教育（トラウマ反応、喪失反応等）について関係者が理解し、専門家とともに取り組む

平成30年7月豪雨（西日本豪雨） アレルギー患者・災害弱者支援活動

◎ 事業の目的

岡山県倉敷市真備地域での、避難所やみなし仮設にいる食物アレルギーがある子どもへの食物の無償提供。調理・冷蔵施設が被害を受けたため給食を提供できずにいる保育園の給食支援。

◎ 事業内容と活動経過

- ・8月は主に電話による相談に応じていたが、多くの団体が各地で支援する中、支援が届いていない地域や人々がいることがわかった。地元の保健師や保育士からの連絡を得て、避難所や仮設住宅にいる食物アレルギーの人に会うことができた。
- ・この地域では避難所への食事提供は、炊き出しも一部あったがほとんどは「弁当」の提供だった。食物アレルギーの人がいた避難所や二次避難所は、4パターンの弁当がローテーションで提供されている所で、全てのおかずが卵、乳を含むものが入っており、ご飯しか食べられない日が長く続いていた。そのため継続的にアレルギー用の食品を送らなければならない状況だった。
- ・食物アレルギーの子どもも含め、保育園の子どもたちの中でも年齢によって十分な給食が提供できていないことがわかり、保育園の園長先生や栄養士と話し合いながら、給食支援（アレルギー対応含む）や栄養支援（牛乳、野菜ジュース、離乳食）を行った。

◎ 事業の成果

1. 食物アレルギー用の食物を避難所やみなし仮設住宅にいる家族に8月～11月に継続的に支援した。12月～3月まで断続的に食品を提供した。
2. 通園する園児の8割以上が被災した保育園の給食施設が回復するまで、8月～12月に、食物アレルギー用の食品提供と給食への補助的支援、栄養不足の懸念に応える形で、牛乳（ロングライフミルク・常温保存品）・野菜ジュース・離乳食・お菓子などを提供した。
3. アトピー性皮膚炎などの皮膚症状のある人へのスキンケア用品・皮膚刺激の低い洗剤を提供した。



食物アレルギー用ランチBOX：保育園や二次避難所に電子レンジがあったので加温して食べる事ができた。



作業中の当法人事務所内の様子：荷受け～発送の期間は日常業務ができなくなった。定期的にこれを繰り返す。



加熱調理のものが増えた：仮設住宅に入ると調理材料も送れる。まだ非加熱食品しか送れない人もいる時期。

4. がれき処理や片付けのために家庭にいられない子どもや、保育園に通所する交通手段がない子どもたちのために臨時に開設された保育施設に9月～11月にかけてリゾートやランチBOXなど、給食に代替する食品を支援した。
5. 当法人で困り事の電話相談を受け付け、必要に応じて専門機関や専門職へ引き継いだ。
6. 保育園、子育て支援センター、保健師、災害支援センターそれぞれと、今後の支援活動について話し合うことができた。

◎ 課題および展望

- ・食物アレルギーの人への食物支援について、多くの食品企業からの支援を受けた。大半は購入したが、水害発生当初は多くの食品の寄付をいただいた。私たちは患者に出会うことができたが、いくつかの場所では患者に届くことなく食品が余り箱のまま積まれている場面も目撃した。災害支援のためには子どもたちがいる多くの現場の人との連携が必要だが、食品企業との連携も欠かせない。より良い支援の在り方について、多くのステークホルダーと連携の在り方について話し合いたいと思った。
- ・支援地域担当の保健師や園長先生らからの聞き取りでは、高齢者がいる家庭、病人や低年齢の子どもがいる家庭の多くが「まだ落ち着かず復興について考えられない」と話している様子だった。母親たちは子どもの健康が気がかりで、災害による子どもたちの心理的影響も気になっていることも側聞した。
- ・子育て世代の人に向けては、保育園に併設されている子育て支援センターを活用して、アトピー性皮膚炎と子育て、食物アレルギーと集団生活、発達障害と子育てなどをテーマにして、小児科医と保護者のおしゃべり会を2019年度以降に継続して開催すべく検討している。告知に当たっては保健所、災害支援センターなども協力してくれることになった。
- ・世代を超えた幅広い人たちが集う場所が必要という意見が、打ち合わせや聞き取りをした様々な関係者から出され、今後の展開について話し合いを続けている。

団体概要

※2019年7月現在

名 称：公益財団法人 ベネッセこども基金

所 在 地：〒206-8686 東京都多摩市落合1-34

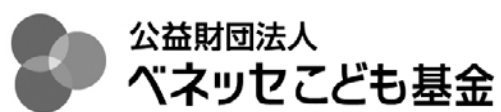
設立年月日：2014年（平成26年）10月31日

※公益財団法人移行日：2015年（平成27年）4月1日

役員および評議員

| | | |
|-----------|---------|---|
| 代表理事・理事長 | 五十嵐 隆 | 国立成育医療研究センター 理事長 |
| 代表理事・副理事長 | 福原 賢一 | 株式会社ベネッセホールディングス 特別顧問 |
| 理事 | 耳塚 寛明 | 青山学院大学 コミュニティ人間科学部 学部特任教授 |
| 理事 | 小見山 智恵子 | 東京大学医学部附属病院 副院長 看護部長 |
| 理事 | 青柳 光昌 | 一般財団法人社会的投資推進財団 代表理事 |
| 理事 | 岡田 晴奈 | 株式会社ベネッセホールディングス 取締役兼上席執行役員 グローバルこどもちゃれんじ カンパニー長 |
| 監事 | 尾尻 哲洋 | 税理士 |
| 評議員 | 高野 一彦 | 関西大学社会安全学部・大学院社会安全研究科 教授 |
| 評議員 | 宮城 治男 | 特定非営利活動法人エティック 代表理事 |
| 評議員 | 西村 洋 | 株式会社ベネッセホールディングス 執行役員 社長室長 |

発 行：公益財団法人 ベネッセこども基金
デ ザ イン：株式会社 協同プレス
印刷・製本：株式会社 協同プレス



<https://benesse-kodomokikin.or.jp/>